イ・ラム・カラプ・テー

その名は知らない

文・挿画　坂口　弘

本当に　私の姿が
見えるのか？

カノンになら　解るのだろうか……

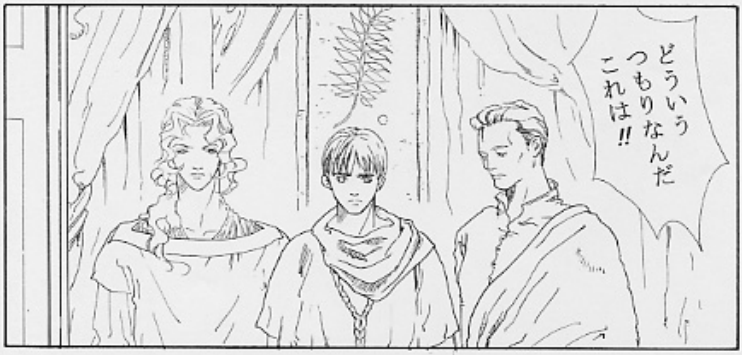
バキッ
おいおい！気を散らすなよ！
たかが組み手、されど組み手、だろ？
ごめん

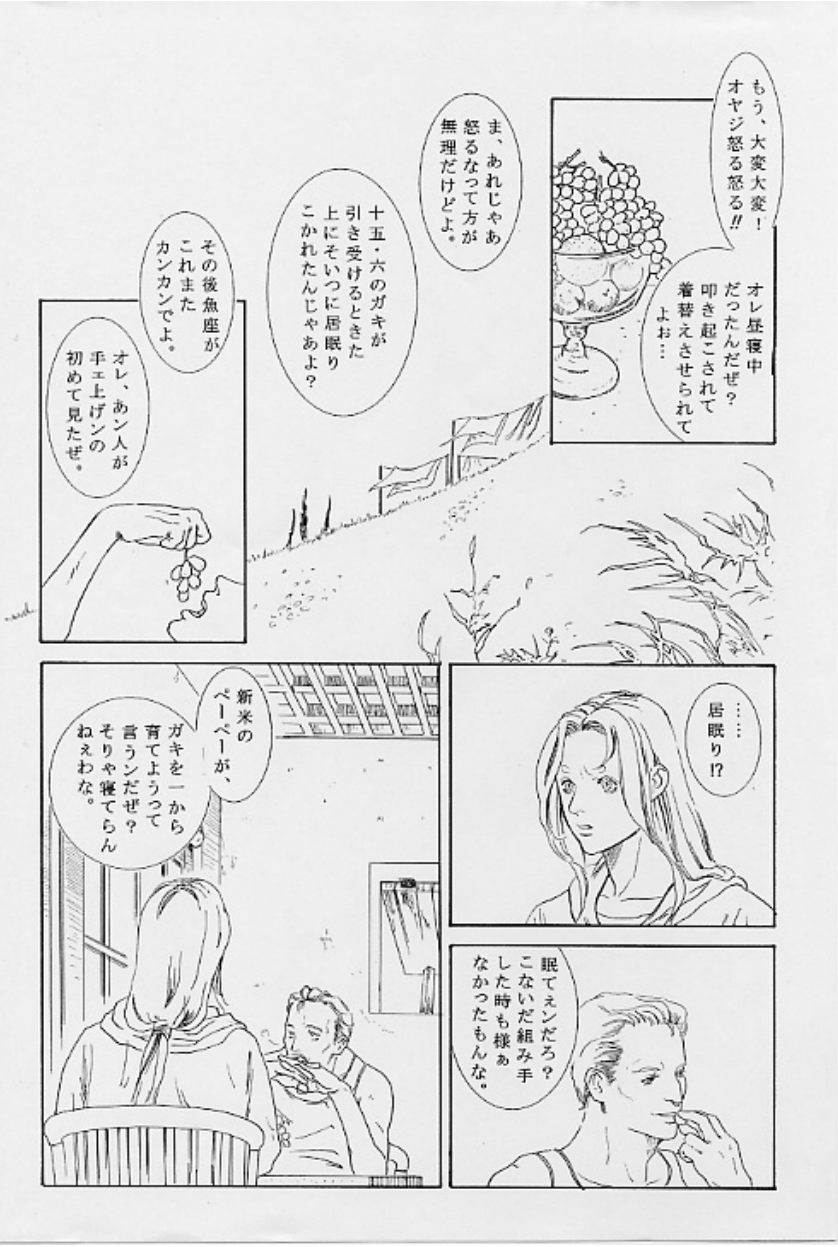
ったく！これがシュラの野郎だったら鼻血じゃ済まないよ？ぺちゃんこのぐしゃぐしゃだぜ？
オレみたく優しい手加減なんて事しちゃくんないよ？
……
――ってお前…
人の話聞いちゃねえだろ？

二人で目指し、二人同じ目にそれを得た…
自分の何が彼にそんなことを言わせたのか
……お前に、一体何が判る!?
判らない…
負うた責の成される所に女神のお力が在りますように…

妹はいつも後悔していた…
貴方を手放したことを、
いつも後悔していた…!!
弟？

何なんだこれは!!
ダン!!


どういうつもりなんだこれは!!


もう、大変大変！オヤジ怒る怒る!!
オレ昼寝中だったんだぜ？叩き起こされて着替えさせられてよぉ…
ま、あれじゃあ怒るなって方が無理だけどよ。
十五・六のガキが引き受けるときた上にそいつに居眠りこかれたんじゃあよ？
その後魚座がこれまたカンカンでよ。
オレ、あン人が手上げンの初めて見たぜ。
……居眠り!?
眠てぇンだろ？こないだ組み手した時も様ぁなかったもんな。
新米のペーペーが、ガキを一から育てようって言うンだぜ？そりゃ寝てらんねぇわな。

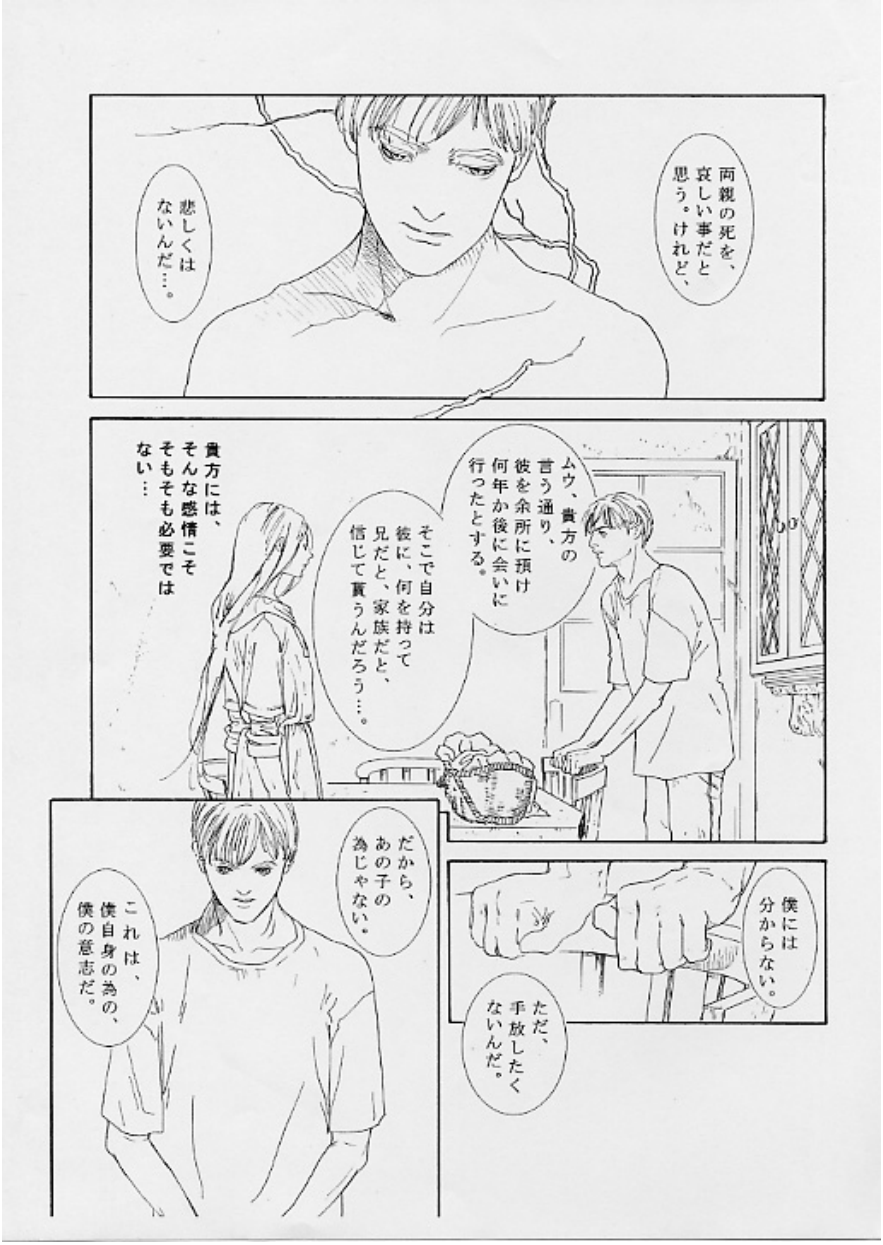
オレはてっきり、あの双子の奴と一緒に面倒見るンだと思ってたンだけどねぇー。
喧嘩したンだって？
喧嘩は、してませんよ…
ふうん…？
ま、オレはあいつ嫌いだからどうでも関係ないけどな。

外面良くて、チヤホヤされっけどああゆーのが一番タチの悪い自己中なんだよな

けれど、変なところで頭が回るから要領は良いからな
要領がいいのは貴方も同じでしょ？
ははは！でも、あんたには負けるよ！
ッ…
ははは

ムウ…
お願いだから…
頭を冷やしなさい！赤子というモノは、本来愛情を媚びる生き物です。貴方が今ここで、それに反応する必要はないのです。
違うよ、ムウ。そうじゃない…。

では、ご自分の立場を思いなさい!!
貴方は、しかるべき施設に赤ん坊を預け、時期を見て会いに行けばいいのです。
……
貴方は今、とても不安定な権力を手にしているのです。
その力が通じるのは僅か、この聖域のみ…
けれど、負わされた責任は大きい。貴方の命一つでは払い切れない程大きい…。他に心を割く余裕など何処にありますか?
駄目なんだ…
悲しくないんだ。


両親の死を、哀しい事だと思う。けれど、
悲しくはないんだ…。
ムウ、貴方の言う通り、彼を余所に預け何年か後に会いに行ったとする。
そこで自分は彼に、何を持って見だと、家族だと、信じて貰うんだろう…。
貴方には、そんな感情こそそもそも必要ではない…
僕には分からない。
ただ、手放したくないんだ。
だから、あの子の為じゃない。
これは、僕自身の為の、僕の意志だ。

いとしい
いとしい　おまえ
いとしい　きみ
いとしい　あなた
かなしさに
むねつまらせながら
この　おもい
なんと　よぼう

本当に　私の姿が見えるのか

サガは目前のアイオロスに向けてそう云った。
言葉の振動は、微風に揺れていた葉の動きを止め、光の波影を凍らせた。

私の姿が見えるのか

短い、このたったの一言が、アイオロスの鳩尾から視野の限りの光景を抉り取った。

ほんとうに　わたしのすがたがみえるのか

アイオロスの喉から、重く、ゆっくりと、生まれなかった言葉が沈む。深く、深く、ずっと深く。
サガの橄欖緑 (olive green) の双眸は、確かにアイオロスに向けて真直ぐ開かれていたが、焦点は彼の体を射しぬいたもっと遠くのところにあるようだった。
六月、真夏の月、夏の始まり。
白く細い槍のような陽が、サガの白銀の頭を縁取って四方に輝く。
彼の表情は、見えない。
彼は、明るい光を纏ってアイオロスの前に直立していたが、何を考え、何を思っているのか、アイオロスには解らない。
眉を顰めているのか、眸をきつくしているのか、厳しい額をしているのか。
一切、アイオロスには判らなかった。見えなかった。

ほんとうに　……みえるのか…

見えないと、
すぐにでも叫べれば…、どれほど良かったか…。
それは、アイオロスが初めて体験する鮮烈な後悔だった。

聖暦八七九六年六月十七日。
先の蟹座より、実に三十年の時を経て聖号最高位を下される者達が誕生した。

黄道十二宮、十二座の聖弓より双子座と射手座。
二人。
その者の生年、双方共に数えで十三。
若い。
聖闘士として黄金の色を纏う黄道十二宮座は、雑兵、青銅、白銀と続く下三位の兵士を束ねる武官であった。外域との交渉を治め、時にたった独りで断罪の判を下さねばならぬ者。女神アテナの神軍の頂点に立つ将軍の位。
これほどに若い将が誕生するのは、平時ではまずありえない。
新年早々に、女神神殿より賜与の使者が十二宮殿に下されたが、既に聖弓を有する七人の将軍のうち五人までが、苦い表情を隠さなかったという。
僅かにも顔色を変えなかったのは、現教皇にして牡羊座の黄金聖闘士「シオン」、遥か東方の神山に座す天秤座の「童虎」、この二名のみであったという。両名とも先の聖戦を知る稀有の人であり、今回の企図はその一人「シオン」の手によるものだった。彼の強硬な姿勢が無ければ実現しなかった事例であった。決してこの少年らが、並々外れた「人」であったからの聖弓佩綬ではない。
後に強靭な行動力と、偏頗の無い指揮、ざっくばらんにして飄逸な人品で衆人を魅了した射手座のアイオロスも、白銀に輝く容姿と、万事に如在無い見識の広さ、細やかさで広く人を惹きつけた双子座のサガも、両名ともに小宇宙と呼ばれる強大な力を制御出来る外、己の支柱の在り方は、なんらその僅かな経験を上回るものではない。
下命は瞬く間に聖域中に知れ渡り、ある者の感嘆を、ある者の憧れを、またある者の憎嫉を育んだ。「秀でたる者」と別な眼差しで認識する限り、対象者本来の質を見る事は難くなる。そんな視線の中で、さらに自らを育み続ける事は骨が折れるだろう。しかし「シオン」は、それが可能な人間を欲していた。

宿老の宮守は、それほど先ではない未来に聖域の変動を覗た。再び起こる最後の聖戦を見た。そして、自らの心臓が最後の鼓動を打つ瞬間も知った。

「可能の人を欲する」彼の心は、だからこそ「可能の確信」も同等に求め、「二人」という手段を取った。二人の少年が、相応の経験を積むまで待つ事も出来る。だが…これまで待つことで人を得てきた「シオン」は、この時は変化を求めた。激しく己を問われながら確立する個が在ってもよいと。

「変化」に希望を感じてしまう己を、老いたと自嘲しつつも「シオン」は頑なに歳少ない黄金聖闘士の誕生を推し進め、拝命の儀が執行されることとなったのだ。

拝命の儀は、静かに行われた。神官の方（かた）は香を炊き、蜜蝋を大神殿の高い天井に灯し、大理石の床に樹林を出現させる。思い思いに生える神官という樹の祈りが七週間捧げられ、五日間の沈黙を奉じた後、宮門の外で潔斎して待つ者らに脇門を開く。

「神官の飯事」と舌打ちする者も多かったが、このビザンチン様式の絶える気配は今もない。女神の託宣は、神庭の番人の子らにとって、拠所であり拘泥の沼となっていたからだ。

脇門は、渋みの濃い仮漆（varnish）が塗られ、木目のくっきりと浮き出た古い門だ。通常この門を利用するのは、聖号を持たない者たち、神官、事務官、世界に散らばる折衝・交渉・工作員たち、そしてごく稀に青銅聖闘士や雑兵たち。

古い栗材の脇門を潜り聖闘士となる者たち――女神神殿で拝命の儀を受ける黄金・白銀位は、この扉下を二度（ふたび）潜ることを許されない。

彼らは、巨大な大正門の開扉を要求せしめる者らである。凛然と頭を擡げ、正々堂々と正門の下を進むのだ。その姿が、後に続く者達の畏敬と渇仰を誘う限り、覆されることの無い不文律があった。連綿と、何千、何万もの将たち

が身をもって生き切る事でしか示せなかった事がある。磨り減った石段に刻まれた無数の足跡。その上を徒する者がまた生まれる。

六月十七日。

神官七十二名、武官二名列席。

脇門を経て、大階段の深奥に位置する女神神殿より勅を拝すると、二人の少年は証として屈膝の礼をとった。黄金聖闘士となったこの時から、彼らは決して女神以外の何者にも膝を折らない。

白濁の実を付けた桑が、中天からの光に押し潰されるような時刻に、年若い黄金聖闘士は誕生した。

一人の名をアイオロス。

一人の名をサガ。

後に教皇候補として拮抗する黄金聖闘士達である。

バキッ

鈍くも辺りに響く殴音。

アイオロスは、牙黄(ivory)色の大地にしたたか打ち付けられていた。

かなりの衝撃だったはずだ。拳を決めたSageの足にもその振動が伝わって来たのだから。

しかし、アイオロスは、何があったか判らない体で、のろのろと上半身を大地から引き剥がした。

頭上からSageの声が降ってくる。

Sageは少し下がり気味の唐茶(cinnamon)色の眸した男で、柔らかくたっぷりとした淡香(biscuit)色の髪をいつも後ろに撫で付けている。イタリアはサルジニア島のモンテベッキオ出身で、二十二の年に蟹座の聖位号を持つに至った。いつも退屈そうに、きょろきょろと辺りを見回し歩いているような男で、聖域内外の噂話や三文記事にやたらと詳しい。

今も、こうして七月の「糞」暑い午後、本来なら白亜の宮殿で優雅に午睡しているはずの時間を戸外で、しかも組み手などという眩暈を覚えるような「糞」真面目なことをしてしまっているのには理由がある。双子の黄金聖闘士と目される二人の少年の、仲違いの訳が知りたい、とこのように。

「おいおい！　気を散らすなよ！　たかが組み手、されど組み手だろ？」

Sageの声は、僅かに苛立ちを含んでいる。

「頼むからまともに食らわんでくれる？」

と、皮肉をたっぷり込めて言ってやったつもりなのに、言われた当人は、呆っと彼を見上げていた。

アイオロスの切れた唇の端からは血が流れ、それは、白茶けた小麦粉を塗したような地面に、埃を立ててほたんと下たった。

アイオロスの眸に焦点が戻るまでに、Sageはたっぷり十は頭の中で数字をがなっていた。

Sageはアイオロスの次の挙動に期待めいたものを持って待っていたのだが…

「――ごめん」

一発吼えたい発作を抑えて、Sageは己が額に手の平をぺちっと打ち付けた。

トロッと暗褐色の血がアイオロスの鼻孔から流れ出でた。しかし、アイオロスは切れた唇から流れる血にも、何年ぶりかで流す鼻血にも、何にも気づいていない様で、拭おうともしないまま、「ごめん」と呟いたきり俯いてぴくりとも動かない。

Sageは思いっきり唇を下に引き下げ、天を仰ぎ見て言った。

「ったく！　これがシュラの野郎だったら鼻血じゃ済まないぜ？　ぺちゃんこのぐしゃぐしゃだ」

Sageが今回アイオロスの組み手を引き受けたのは、単に自分の好奇心を満足させたいだけだったのだが、ここまで彼の腑抜け具合が徹底してると、つくづく引き受けたのが自分でよかったと思うのだ。

今朝、合同報告会議が終わり座が解散した後、銀（しろがね）色の髪した新米（ヒヨッコ）が部屋から消えるのを見計らって口に出された、アイオロスの手合わせを願い出る言葉は、誰に向けられたものではなく、その場にいた魚座、山羊座がこの場に立つ可能性もあったのだ。Sageは考える。魚座であれば、最初の五分でアイオロスはここに置き去りにされただろう。山羊座なら、想像するのも怖いが、恐らく半分死体になったアイオロスがここに転がっていて、自分は午睡を叩き起こされその回収に走らされるのだ。

Sageはガックリと肩を落として盛大に息を吐くと、腕を組み、自分より三十五も年下の同位の少年に言葉をさらに

重ねる。

「オレみたく優しい手加減なんて事しちゃくれないよ?」

最初から口を割らせるのが目的で、組み手なんか適当にやればいいや、等と思っていた自分を何処に置き忘れたのやら、Sageは先ほど浮かべた山羊座の場合であればという仮定の結果と、それに比べての自分の心配りの細やかさを少年に教えてやる。

教えてやっていたのだが…

「―って、お前…人の話、聞いちゃいないだろう?」

先ほどから寸ぷん違わぬ格好で尻を地に落としているアイオロスは、どう控えめに見てもSageの言葉に感銘を受けているようには見えない。そしてまた恐らく、聞いていないのではなく聞こえていないだろう。一言も……。

Sageは無視されているこの状況に切れた。そして、何が何でも二人の少年が袂を別った訳を聞き出してやろうと心に誓う。

射手座のアイオロスと双子座のサガ、聖位を授かってその後、二人の間で何があったのか。ゼロ歳からの幼馴染達は、今ではろくに会話もしない状態だ。

もっとも、Sage達、他の黄金聖闘士の目には、一方的に銀の髪したサガが、馬鹿丁寧な言葉遣いと物腰で、アイオロスとの間に壁を造り、会話出来ない状態に持ち込んでいるように見えているのだが。

二人の間に、何があったのか。

ぐいっと、Sageはアイオロスの腕つかむと、尻餅搗いたままの彼を、そのままズルズルと松の樹の木陰へと引きずっていった。途中から何をされているのか判らず、目を見張って彼を見上げたアイオロスをそのままに、Sageは井戸に冷やしておいた地酒を引き上げて来ると、枝に引っ掛けておいたタオルを首に巻き、ドカッと腰を下ろす。

「話せ」

ごくごくと冷えた液体で喉を潤すと、Sageは命じた。

アイオロスは、ゆるゆると首を回し、木に凭れて酒を飲んでは汗を拭うSageを見つめた。足元には濃い影が、水溜りのように染みている。

話せ。とは何を指すのか、アイオロスには分かっている。

別に何も無い、という言葉が通らない事も分かっている。

自分とサガは、生まれた時から聖域で育ち、七つの頃には星を持つ者として認められており、非公式にだがSageを始めとする十二宮の番人達の元にも足を運んでいた。

サガには一卵双生児の弟がいたが、黄金十二宮に登るべく星を持つ者として彼の方が選ばれた時から、アイオロスとサガの方が双子のようだった。大概の行動を共にし、周囲の者も二人を一括りに扱っていた。

アイオロスは八七八一年十一月三十日、サガは八七八二年五月三十日に産声をあげた子供だった。

色が白く、豊かな白金の髪と橄欖緑の眸を持つサガは北欧の血を思わせる容姿だったが、髪と眸の色が、まるで女神に愛される橄欖の葉のようだと称えられていた。橄欖の葉は、表面に細かな産毛を有し、ギリシャの強い陽差しを受けると、銀色に白く輝くのだ。

一方アイオロスは、生粋のギリシャ人らしい肌を持ち、癖の無い照柿(burnt orange)色の髪を短く切っている。細い髪は風を受けるとさらさらと舞い上がり、幾筋かは金色に光った。誰が彼を名づけたのか知らないが、アイオロスという「風の王」を表す名を頂く彼の眸は、明るい鳶(coconut brown)色でいつも喜びや楽しみに輝いていた。

アイオロスは、七歳のときに黄金位を得る資格がある者として名を呼ばれた時から、未来はきっと黄金聖闘士になるのだろうと自然に思っていた。生まれた時からの友人であるサガも選ばれているのである、何の不安や疑問を抱く

必要があろうか？自分とサガは近い将来黄金聖闘士となって十二宮に登るのだ。ごく自然に、ごく当たり前に、アイオロスは自分の未来を描く事が出来た。そして、それはサガも同じであると迷い無く信じていた。

だから、今年の六月十七日、周囲の様々な反応もアイオロスは気にならなかった。二人で目指し、二人で同じ日に「それ」を得るのだ。言いたい者には言わせておけばいい。自分たち二人に恥じるものは微塵も無いのだから。

「負うた責の成される所に、女神のお力が在りますように……」

牡羊座の聖闘士でもある聖号位の長は、深く皺の刻まれた骨ばった手を、跪く二人の頭にそっと乗せ、撫ぜた。

全ては終了した。二人はもう衆住地区には戻らず、今日からは守人となる宮殿で生活するのだ。

女神神殿の大正門を抜け、大階段へと一二〇メートルも続く柱廊に差し掛かったとき、そこは摂氏四十度を超える光に白く輝いていた。全ての空間が輝いていた。

あの時、自分は何を話したのだろうか？

先に受けた儀式の事か、これからの事か、開放感と希望とひとつの目的を達成出来た幸福感で一杯だった自分をアイオロスは覚えている。

サガの銀髪が、光の空間を摺りぬけて、綺麗だった事を覚えている。また、その背なをたっぷりと覆った、純白の画布にも見えるサガの肩掛けをを覚えている。

けれど、自分の何が、彼にあんなことを言わせたのか、判らないのだ……。

少し思いをやるだけで、鋭い傷みを持って身を起こし氾濫する記憶。

サガは突然歩みを止めると、ぐるり体を返して自分を見つめて言ったのだ。

「……お前に、一体何が判る？」と。

自分は何か言っただろうか？　アイオロスが戸惑っているうちに、サガはまた言葉をぶつけてきた。

「本当に、私の姿か見えるのか？」

その口調は、先の猛った苛立ちを含む言葉と異なり余りにも静かに放たれた。それが、さらにアイオロスを混乱させた。

アイオロスには、サガが何に憤っているのか、苦しんでいるのか、悲しんでいるのか、皆目検討がつかなかった。

辛いのは、「どうせお前には何もわからない」と、見下されて、突き放されて言われることだったが、その時のアイオロスには、サガがそういう心境から言ったのかどうかも判断がつかなかった。

そして、次の日からのサガの変容はあからさまで、アイオロスを全く頓着せず、目を合わそうともしなかった。

たまに真面に出会うことが会っても他人行儀で、それを見る他の者の方が驚いてアイオロスに説明を求めたりする。

「喧嘩でもしたのか」とは一番よく尋ねられた言葉だが、喧嘩をいつしたのか自覚がない。喧嘩であればどれだけましかと思う。それで結局、「そんなことはない」と言うことしか出来ない。

「何かサガを怒らせるような事をしたのか」

と問われれば、怒らせなかったという確信も持てない。

それで「そうかもしれない」と答える。

アイオロスは、追求者達に曖昧な笑顔を作る事しか出来なかった。好奇心在って尋ねる者が大半の中、アイオロスを案じて声を掛けた者達は、そのアイオロスの応えに鼻白んだ。

好意を持って尋ねてくれた人達の心に応えられない現状は、アイオロスの焦燥感を更に煽った。

突然変わってしまったサガとの関係を辛く思う。

あの日から、長の望みを手にした時から、アイオロスはサガの気持ちを探して、苦しくてたまらない思いでいる。

そして今日も、「話せ」とSageに言われたが、アイオロスは今まで繰り返してきた答えを繰り返すしかなかった。

Sageはそんな煮え切らない様のアイオロスに舌打ちする。アイオロスの口はますます重くなる。

「オレ、帰るわ」

とうとうSageはそう一言いい残すと、さっさと立ち上がりアイオロスを置いて去っていった。振り返りもせず遠ざかるSageの影が長い。アイオロスは立てた片膝に頭を埋めると、眸を閉じた。

赤みを帯びた光がやんわりと彼の頬を挟む。光は槍から柔薄なフラネル(flannel)に溶け変わり、アイオロスの背後に被さった。

泣いておしまいよ、と誘っていたが、アイオロスは、ため息すら出せなかった。

「ちわー」

開け放たれ、夜気に揺れるカーテンの向こうから緊張感の無い声が届く。

Sageだ。ユーレニアは軽く息を吐くとペンを置いて、声が飛び込んできた二階の窓から外を覗いた。月影に照らされて立つ男が一人。

「おい、これ受け取ってくれ!」

声と共に一本の瓶がユーレニアの目の前に現れた。驚くことなく、投げつけられた酒の入ったそれを片手に受け取ると、ユーレニアは窓の傍から離れた。

ガツン、Sageの頭が窓枠にぶつかっている。

「ってぇ〜」

ぶつけた場所を抑えながら、Sageは同僚の魚座の黄金聖闘士の執務室にすとんと足を下ろした。
そこは広い石造りの部屋だったが、床はペルシャのキリムに、壁はどっしりとした本棚に隠れていて殆ど肌が見えない。部屋は中ほどから仕切られていたが、その仕切りも書棚だ。ファイルや厚い背表紙の本ばかりが囲む部屋を、楢(oak)で作られた優美な書籍棚が救う。
「そこは玄関ではないと何度言ったら判るのかね、君は」
淡い水浅葱(bright turquoise)の双眸を冷たく尖らせてユーレニアはSageを非難した。
しかしSageは一向に頓着する様子は無く、「まあ、いいから」と、いつもの自分の指定席であるソファにどっかりと座り込んだ。
ユーレニアは柳眉を上げ、今一度きつくSageを睨む。
身長六フィート弱、細身で、大きく波打つ淡い金髪、線の細い研ぎ澄まされた美貌、こんな彼の睨み付けるという行為には、獰猛な大型肉食獣の恐ろしさこそ無いものの、冷たく怜悧なハンターの爪の鋭さを喚起させる不気味さがあるのだが、どう言うわけか余りSageには通用しない。
ユーレニアは意の通じない行為を諦めて、グラスを用意するために奥の部屋に向かった。その背に、「すげぇ…まだ仕事やってたのか」と声が届く。Sageがソファから手を伸ばして、デスクの上の書類を引っ掻き回している。
黄金聖闘士にも色々だ。
黄金聖闘士という聖位号は、天の黄道十二宮になぞられ十二ある。十二在るそれは、「火」「地」「風」「水」の四大に分割され、一つの要素(element)に尽き三人の黄金聖闘士が配されている。
黄金聖闘士の下にそれぞれ直轄の兵団があり、一つの要素に三個師団が形成される。殆ど聖域内外の諸事はこの要素単位で処されており、ごくまれに二つの要素が共に動きをする事もあるが、これは本当にごくまれの事である。ま

たさらに、四つの要素が一斉に集うということは、神軍が形成されるということで、それは聖戦が行われるということを指す。

ユーレニアの預かる魚座は「水」の要素に属する。これは蟹座、蠍座の黄金聖闘士と協力体制を取る性を表す。

しかし蠍座は未だ空位。よって、残る蟹座のSageと諸般雑な職務を分かち合わなければならないのだが……Sageが執務室に居る姿を見るものは少ない。

蟹座の黄金聖闘士が誕生して早三十年が過ぎるが、その間、お陰でユーレニアの手が少しでも空くことになったかといえば、その逆なのだから不思議なものである。

取ってきたグラスを、すっかり寛いでるSageに渡すと、ユーレニアはやりかけた仕事の残るデスクへと戻った。

「あれ？　あんたは飲まないの？」グラスを一つしか持ってこなかったユーレニアに対して、Sageは素朴な疑問を投げかける。

「私はこのままで結構だ」

言ったユーレニアは瓶の口を唇に当てがい、直接液体を喉に流し込んだ。

それを横目でちらりと見遣って、「美女（胸はない）なのになぁ…」とSageは暢気に嘯いた。

「で、どうだったのだ？」

ユーレニアはゴトン、と瓶をデスクに戻すと、ペンを持ち直し尋ねる。

Sageは手の中にあるグラスの酒をちびちびと舐めながら（手の届く範囲に酒瓶を落してくれないあたり、ユーレニアが今日はそれ以上の酒を自分に与える気が無いのは明白だった。ならば大切に飲まなければなるまい）、今日の午後の一幕を話して聞かせた。

「結局何も判らず仕舞いか」

役に立たない奴だ、と言外に込められた物言いにSageは反発を覚えた。
「じゃあ、あんたたちは何か判ったのかよ？」
ちろり、と冷たい視線がSageに向かって飛ばされた。
「双子座の様子がおかしい事は、昨年の暮れから我々は承知している。が、今年前半は目立った乱れも見えず、一見落ち着きを取り戻しているように振舞っていたから聖弓の授得に賛同したのだ。彼の場合、射手座のみが十二宮に上がるより、多少の精神的な乱れを引きずっていようと同じくして聖弓を得る方が何かと無難に事が運ぶと見たのだ。事が表面化してから鼻先を突っ込みたがるお前と一緒にされては、こちらの面目が立たないと思うが？」
淀みなく一気に告げられた言葉に、Sageも負けてはいない。
「変だと思ってたんなら、何でそん時にどうにかしとかないんだよ。半年も昔の話しじゃん」
「パンと世話は焼いたことが無いんだ」
「ええぇー、だったら今もほっときゃいいじゃんよぉ」
かなり事に面倒臭さを感じ始めているSageは、もうやめたとばかりに渋面を作って不満を口に出す。
そんなSageを見て、艶やかに双魚宮の守人は微笑んだ。
「そうもいかないから探りを入れているんだよ、蟹座」
その笑顔を見て蟹座はげっそりとした気分に陥る。確かに書類上の仕事はサボりにサボっているかもしれないが、現場で動いているのは自分なのだ。にっこり笑って「言ってらっしゃい」と一言言えば済む奴は楽でいいよ、とSageはおあずけを食らった犬のようにユーレニアを睨み上げる。
ユーレニアは微笑をかみ殺して言った。
「大丈夫。君を苦手な双子座のところになどけしかけたりしないさ」

「苦手なんじゃない！　オレはあいつが嫌いなの！」
三十六も歳の離れた銀の髪の少年に対する不快感を、Sageは「嫌い」という言葉で表した。ユーレニアは、解ったというようにやんわり笑んでその言葉を受け流した。
あまり深く自分の衷を追求しようとしない性癖のSage。じっと目を凝らして見れば、彼の今の感情が、実はもう少し違う結論を生むと考えるユーレニアは、それ以上の詮索もせず書類に視線を戻す。
「もういい！　帰るぜ！」
一気にグラスに残る酒を飲み干すと、Sageは立ち上がった。
「玄関から出たまえよ」
ユーレニアはそれだけ言う。
Sageは立ち上がり、それきり関心を自分に向けない男をじっと見下ろした。洋燈の光を受けて、ユーレニアの作る影が暗い。
沈黙が部屋を包む。
ふとユーレニアが、動く気配の無いSageに眸を上げてみると、黙って自分を見つめる唐茶(cinamon)の眸に遇った。
Sageは真直ぐにユーレニアを見ている。そして、ぽつりと言った。
「でもよ、アイオロス、可哀想だぜ…」
「そうだな」
ユーレニアは静かに応えた。
「んじゃあな」
と、今度こそSageは部屋を後にした。その後姿を見つめながら、ユーレニアは記憶を辿った。

一週間前の定例会議の後、大神殿から旧道の細い道を下り、薔薇の咲き乱れる裏庭に着いた頃、彼は二人の少年の存在に気付いた。

アイオロスが「サガ」と呼びかけた応えに、かの少年は「射手座」と言ったのだ。アイオロスは小さく息を呑んでいたが、それでも、用件の資料の交換などは何とか取り付けてその場を去っていった。

双子座はともかく、射手座の方は最後まで身を潜めて成り行きを見守っていた自分の存在に全く気付かなかっただろう。

全身全霊でもって、まるで壊れ物に触れるかのように、双子座に精神を寄り添わせようとしていた姿が哀れだった。

そして、風がひゅっとその場を一抜けした後、双子座は振り返る事もせずに「何か御用ですか、双魚宮の主よ」とユーレニアに言葉を向けてきた。

その一言に、ユーレニアは成る程と思ったものだ。はじめから、双児宮の幼い守り手は自分を計算に入れて今の寸劇を披露して見せたのだろうと。

「なんとも、ここに咲く薔薇たちにも太刀打ちできないほど刺の在る会話だったな」

「私は貴方と話している今と、全く同じ話方をしていたつもりですが、刺が在りますか」

「いや、今は創世記の蛇がいるね。白を切りたいようだから私は追及しないが……代わりに擦り寄って来る友人をそうも拒絶する理由を尋ねてあげようか？」

ユーレニアは嫣然と微笑んで、手近の薔薇を一本手折りその香りを確かめた。

目の端でそれを捕らえながら、サガは「射手座と私が一纏めに認識されることに、常々不満を持っていました。今回、双子座の聖位を得たに当たって、そのような扱いを受けずに済むよう、個として立つことを望み、そうなるべく行動しているだけです」と一言に言ってのける。

ユーレニアは、ふむ、と納得するような表情をしてから、先の微笑よりさらに華やかに微笑みながら口を開いた。
「それが本当の目的なら好きにしてみるといいさ。けれど、君が傷つけた射手座の子守りを誰かに頼むつもりなら、傷みというものは、負わせた本人にしか手が付けられないものが在るということを肝に命ずるべきだね」
すっと何かがサガの手の甲を撫でた。彼を追い越しざま、魚座の聖闘士が手にした薔薇で薙いだ風だ。
「その傷は、舐めておけば明日にでも直る。けれど、今私が君を半身不随にでもした場合、私のしたことは十年経っても消えないだろう。本当に身軽に生きたいのならば、そんな傷を何かにつけることは極力避けた方がいいな。双子座殿」
歌うように言いながら、ユーレニアはサガの前から、彼の守る宮殿が在る薔薇の群生する野の奥へと姿を消していった。
だから、ユーレニアはあの後、双子座がどんな気持ちを表情に滲ませていたか知らない。見ておけばよかったな、と彼は今思う。
サガがアイオロスと距離をおこうとすることに、ユーレニアは不自然さを見る。それは、ごく幼いころから二人一組で見てきたせいだけではない。どこか必死で突っ張っているサガの様子に、困ったものだ、と我知らずため息が出るのだ。

Sageの消えた夜気は、海風を孕んで優しくそよいでいる。小さな羽虫が洋燈の光に誘われて、ユーレニアの手の周りに輪を描いては離れる。あの二人はこのまま離れるのだろうか？
惜しい、と正直思う。
幼い頃よりの友情なり思慕を、そのままの形で保つことは出来ない。しかし……変化を厭わなければ、どんな形に

も繋げてゆくことは出来るのだ。その事に価値を見出せるなら。
もう一度ユーレニアは溜息をつく。自分ぐらいの歳になれば、誰かとそんな皮膚の引き攣るような不愉快なすれ違いは起こさないものだ。言いたいことを言っているようで、起こす前に相手を見極めるし、距離を置くか、折れるか譲るか…諦める。
妥協点の高さは若さに比例するのかもしれない。
なんにせよ、双子座と射手座のやっていることは、もう自分には真似できない事である。うまく乗り切れば善し。仮令、失敗しても、人間は生きているのである。黄金聖闘士という彼らの職務に支障はない。
さてユーレニアは思考を止めると、今までほって置いた仕事に手を伸ばす。時計は二十二時を回っている。双魚宮に戻るのは明日の日付に変わってからの事となりそうだった。

三ヶ月が過ぎようとしていた。
サガは相変わらず職務以外の事でアイオロスと口を訊こうとはしない。
原因が判らずとも、アイオロスはサガとの友情は消えてしまったのだという事に目を向けたくなかった。だから人に聞かれる度に、気鬱になり、言葉を濁してその場を去ってしまった。
機会があればサガに声を掛けた。不快感も与えないように細心の注意を払い働きかけてきたつもりだった。
けれど、事態は元の鞘に収まる方向には向かっていない。
サガの周りには徐々に人が増えていっていた。それまでは、アイオロスが居た場所に、何人もの人間が立っていた。

その誰もが成人した人間で何がしかの才能に秀でた者達ばかりだった。
アイオロスはサガの聡明さを幼い頃から知っていた。またさらに、それがあまり自分の興味関心の向かない分野での聡明さだということも知っていた。図書の館に篭るより、アイオロスは外に飛び出し、自分の足で物事を感じている方が好きだった。
アイオロスの足は次第にサガから遠ざかっていった。彼のもとにも、新しい人脈が生まれつつあり、要素の異なるサガと接する機会は、アイオロスがそれを掴む努力をおざなりにしだした頃から、日を追う毎に少なくなっていった。
アイオロスは今も、目の端に映るサガの姿に、心を引き千切られる。しかし、サガはそうではないのだろう。
もう、考えるのは止めよう、考えても無駄だ、と幾度も思う。
しかし、ふと気の緩んだ隙に、すぐに入り込む「サガ」という思考回路は、雑草のようだ。刈っても刈ってもまた知らぬ間に生い茂る。
何故なのか、アイオロスには理解できない。

木曜日、久しぶりにアイオロスの半日が空いた。
本当なら在任浅い彼には、覚えなければならない事がまだまだ山のようにあり、時間が「空く」などという概念は存在しないはずない。
が、火の element の指揮官であり、全聖闘士を統率する白羊宮の主が、「休んできなさい」と直接言ってくれた。
午後からは彼について「火」が担当してきた諸地域の歴史を詳しく検討、確認の作業をするはずだったが、「休んできなさい」という言葉に、アイオロスは自分がとても疲れていることを知った。
「サガはどうだろうか?」

ちらほらと聞こえ始めた彼の噂はいつも立派なものだった。知識深く、六ヶ国語を操り、柔らかな物腰で臆することなく、はるか年長の下位の者達や、彼の新たな職務に携わってきた多々の協力者となるべき専門家等と渡り合う姿は賞賛を浴びつつある。加えて「風」の黄金は現在聖域にサガ一人しか居ない。Elment の中、最年少の指揮者……「カリスマ」という言葉が徐々にサガの身を照らし始めていた。

アイオロスはため息をつくと、またサガの事を考えていた思考を切り捨てる。

陽射しは中天より傾いてはいるが、その威力はまだ衰えを知らない。

人目を避けて、衆住地区と下界を遮る広大な松の原生林に分け入る。木陰に入れば湿度のないギリシャの気候は、十分な心地よさを提供してくれる。

幼い頃、よくこの森に入って遊んだ。

アイオロスは、まだ聖域内の教育機関に入る前、ムウと呼ばれる不思議な青年のもとで生活していた。小さな診療所で生計を立てていた彼は、紫がかった灰色の髪を長く伸ばし、たいていは背中で紐で括って一本に纏めていた。濃い、時に黒くも見える紫色の眸は大きく、東洋人である彼の幼顔に一役買っていた。アイオロスの物心ついた時から容姿に変化がなく、幼い彼にも丁寧な言葉使いを崩さない青年だった。時にアルカイックな微笑を浮かべてじっとこちらを見る姿は、神秘的で、しばし見惚れたものだ。

アイオロスが今歩いている道は、そんなムウのもとで生活していた時に良く通った道だった。随分と下草が増えているが、処所に野苺の暗色の葉が見え隠れしている。真直ぐに進めば広い空き地に出るはずだった。久しぶりにそこで寝っころがって空でも見上げて見よう。

そう思ってやって来た。

日陰の明るさにすっかり目がなれた頃、アイオロスは懐かしい空き地の入り口に立っていた。

最後に訪れたのは何時であったか…。あわあわと陽に照らされた空間は、よく見ると崩れた石柱が転々と転がっている。春には緑で溢れる小さな草原は、今では枯れ尽くし、渡る風に揺らいで金色の水面のように輝いている。燥いた草の匂いがあたりを満たし、抜けるような青空が天蓋を作っていた。綿を千切ったような白い雲がゆっくりと西に向かって流れている。

体中に広がる開放感に、アイオロスはざっ、とそこへ飛び込もうとした。

しかし、何かがその足を止めた。

アイオロスの左前方、森との境目に人影。

サガが、双子の弟と共に、朽ちて痘痕だらけの石柱に並んで腰掛けていた。

その光景が、アイオロスの足を止めたのだ。血脈の鼓動が大きく、痛いほど皮膚に響く。外へ、外へと飛び出そうとする鼓動は、身の内から熱をも奪う。体が芯から凍える。

陽の光は変わりなく、きっぱりと全てに光矢を振り下ろしている。

乾いて明るい空と大地。

アイオロスは、今ではすっかりこの場所に来たことを後悔していた。

サガは、特別嬉しそうな表情をしているわけではないが、弟が何かと話し掛けるのだろう、その言葉を静かに聞いて居るようだった。

十二宮の中で見る凛然とした表情はなく、体の大きさにまとまっていると言うのだろうか、とても落ち着いて見えた。

そして、一卵双生児である弟、カノンは…とても幸せそうだった。

カノンになら　解るのだろうか……

咄嗟にそんな言葉がアイオロスの額に浮かんだ。
見ているのが辛くて、二人に気付かれないように、そっと踵を返した。
自分は何をやっているのだろう。息を止めて、罪人のようにこそこそと身を隠している。何故出て行って話しに加わろうとしないのだ？　カノンが羨ましければ、同じようにサガに話し掛けたらいい。笑いかけたらいい。
何がこんなに辛いのか？

夜半、藤色の髪に背中を覆われた青年が、幽かなノックの音に玄関へと向かった。
「誰です」
と誰何する。急患にしては緊迫感がない。
青年は扉にそっと手の平を置いた。ためらいと見知った気光帯 (aura) を感じる。青年は、すっと扉を内に引いた。
「アイオロス！」
闇に飲み込まれてしまいそうな少年が、一人で立っていた。
「お入りなさい」
と促し、屋内の灯り照らし出されたアイオロスの顔を見て驚く。どれほど泣けばこんな顔になるのか。

アイオロスを椅子に腰掛けさせると、ムウは落とした風呂の火を点けた。自家製の香草茶に火酒を数滴落し、一つしか灯っていなかった部屋の灯りを次々と燃え上がらせた。

ぱあっ、と明るくなった部屋に、柔らかく清々しい香りが満ちる。

「アイオロス、これを少し飲んで、落ち着いたら、お風呂に入ってらっしゃい」

そっと頭を撫で付けられ、囁かれたアイオロスの眸に、ふっくりと涙が盛り上がった。涙はすぐに形を崩し、次々と膝の上で硬く握り締められた拳にパタパタとしたった。

何処をどう歩いてきたのか、あちこちが泥で汚れ、擦過傷をつくっている。

ムウは唯黙ってアイオロスの頭を撫でていた。と、食い縛る歯列をこじ開けて、アイオロスが言った。

「ムウ…帰りたくないんだ…戻りたくない…」

ムウは自分の手が強張るのを感じた。黄金聖闘士が、しかも拝命して三月経つか経つまいかの今、自宮殿に戻りたくないなどとは！　内心の驚愕をどうにか抑えて、「訳を話して下さいませんか」と穏やかに尋ねて見た。

「どうしても辛い…」

それ以上言葉を繋ごうとしないアイオロスに、ムウは唯黙って頭を撫で続ける事しかしなかった。

翌早朝、ムウはまだ眠っているアイオロスを起こさないようにそっと小屋を出た。置手紙には朝食を取るようにと一言、それにやっておいて欲しい細々とした仕事内容を書き付けてある。

明けきらない薄闇の中を、ムウは早足で進んだ。のっぺりとした岩棚にある小屋からぐるりと裏手に回り、眼前にそそり立つ岩盤が見えて来た頃、彼は葡萄灰(raisin)色の眸を閉じた。五秒程して開かれた眸は、淡い緋衣草(salvia blue)色の燐光に縁取られていた。

そして次瞬、彼の姿は消えていた。
藍を含んだ墨色の空間だけが、岩盤の上に残された。

「アルデバラン、早朝に申し訳ありませんが、少しお尋ねしたいことが在ります」
アルデバランは眠りを起こした声に向かって「イルベスか」と短く尋ねる。確かめる事もないのだが…。
こんな時間に、結解が幾重ににも張り巡らされている金牛宮の主の寝室の扉向こうなどという場所に、他の誰が入り込めようか。
聖闘士とは別種の力で、巨大な念動力を持つ次期白羊宮の主人、ムウ＝イルベス・高琪。頑なに十二宮に上がる事を拒否しつづける彼が、何用でここまで来たか。常ならば、麓に構えた自分の小屋に現れるだろうに。
アルデバランは掛けていた寝具を一息に剥ぐと、外に向かって言う。
「すぐ起きる。一分待ってくれ」
約束の一分後、金牛宮には漆黒の大廊を歩く凸凹の二人連れがいた。方や金牛宮のアルデバランは七フィート近い巨漢で、もう一方のイルベスときては五フィート六インチの華奢な体躯の持ち主だ。柔らかな山羊の革靴を履き、短衣を幅広の帯で締めたイルベスの足は、音を立てずにアルデバランの後をついて歩く。
「アイオロスがこちらに来ています。帰りたくないといっているのですが、何か心当たりはありませんか」
はあー、とも、ふーっ、とも取れない奇妙な息を吐いてアルデバランは木賊(spruce green)色のペンキで塗った、樫の一枚板の扉を押した。
扉の向こうは全面ガラス窓になっていて、至る所に植物の鉢植えが置いてある。温室のような細長い部屋が、大理石の壁に付け足されている。

ここは、金牛宮の食堂兼厨房で、八年の歳月を掛けて主が宮殿の外壁に接ぎ足した部屋だった。最後の仕上げ、付け足した部屋と金牛宮を結ぶに当たり、当然といえば当然だが、牡牛座は宮殿の壁をぶち抜いた。

この時、まさかの意表をつかれ慌てたのは、管理課の諸面々である。

まさかの意表とは、規格外れの多い黄金位の中で、唯一彼等の常識が通用する人物であると、アルデバランが信じられていたからだ。いや、頼みの綱と目されていた、と言った方が正しいかもしれない。

結局、壁に孔を開けた一件は不問に付せられたが、アルデバランへの信用は多少の疑いを混ぜたものとなったいえる。

さて、大きな植木鉢を適当に隅に寄せ、アルデバランは客人の席を確保すると、入って右奥に拵えてある厨房へ湯を沸かすべく分け入って行った。

イルベスの眼前に広がったガラス窓は、僅かな色味の変化をゆっくりとその表皮に這わせている。厚い薄墨の空間が、甕覗き色のベールで縦に刻まれてゆく。森として、まだ鳥の声も聞こえない大気に、じわじわと陽の触手が絡みついてゆく。

夜の帳が払われるのは速い。ほんの一本、陽を含んだ糸屑が帳の上に零れれば、糸屑は解れて薄く膜を張り、やがて発光し帳を砕く。

「どうも、サガと関係が拗れたらしい」

熱い珈琲をマグカップに注ぎながら、いつの間に戻っていたのかアルデバランが口を開いていた。

「原因は何なのですか？」

イルベスは渡されたカップの熱さに吃驚きながら尋ねた。

「原因は知らない。原因を知っているのは双子座しかいないんじゃないか？　我々の知っている事は、原因ではなく、結果だけだ」
　青い琺瑯塗りのマグカップを唇に運んで、アルデバランは一息ついた。
「具体的に、どのような状態なのでしょうか？」
　牡牛座に溜息つかせた理由に思いを馳せ、僅かに眉根を寄せたイルベスは問うた。
「具体的に、か……まぁ、一方的にサガがアイオロスを無視しているというのがそうなのかな…」
　アルデバランはこめかみに人差し指をあてがい、こりこりとそこを刺激しながら言い淀む。
「俺も、詳しい事は知らないんだが……」
　責めてくれるな、というようにアルデバランは溜息を吐く。
　つられてイルベスも吐息を吐いた。では、事は「友人と仲違いをしました。だから仕事に行きたくありません」というわけなのだろうか。正直、そんな事で人馬宮に戻りたくないなどと泣かれても、「甘えるな」としか言えない。余りといえば余りな原因に拍子抜けの感が拭えないイルベスは、小屋に居るアイオロスに向かって苛立ちを覚え始めていた。
　と、そこに、
「珍しい人間が居るじゃないか」
　木賊色の扉の影に、すらりと漆黒の髪の男姿が見えた。
「シュラ！」
　声を出したのはイルベス。そんな彼を、シュラと呼ばれた男は冷ややかにhematite(赤鉄鉱)の双眼で見下ろしている。

「こんな所で何をしている」
シュラは、威圧的な態度でイルベスに対峙した。僅かに背を反らし瞳を凝らしているイルベスと、高圧的なシュラを取り成そうと、アルデバランは何故シュラがここ金牛宮に居るのかをイルベスに説明する。
「来期からまた南米地区の視察が入っているんだ。その打ち合わせと見直しをやっていたら遅くなったんで、こっちに泊まって貰ったんだ」
シュラは魔羯宮の番人、山羊座の黄金聖闘士で牡牛座と「土」のelementを共にする。短く切った髪は前髪がやや長く、見事な漆黒。眸は切れの長いhematiteで、無機質的な光を放ち常に固く厳しい。スペインの山岳民族を祖を持つ彼の体躯は、頑丈な骨としなやかな筋肉で形作られ、長い手足の動きの滑らかさは黒豹を想起させる。
「こいつに説明してやる必要はないはずだぞ金牛宮。これは、聖域に立ち入る資格の無い者。お前は何故こんなところにいる」
低い声が詰問してくる。一切の曖昧さを許さない姿勢がそこには見える。気配が質量を持ってイルベスの肩に被さる。
アルデバランは、この厳格な同僚に何と真実を伝えたらよいのか解らない。射手座がその職務を放棄しようと、イルベスの元に転がり込んでいるなどと知れればどうなるか。山羊座はその行為を、決して許さないだろう。許さないとき、何がどうなるのか。判っているだけにアルデバランはその場を何とかして治めようとする。
「シュラ、まだ早い、もう一眠りしてきてらどうだ」
治めようとするが、二元があまり臨機応変に出来ていない性質の漢だ。今も、「何が早いものか。もう夜は明けているぞ」と言う山羊座の言葉に外を見やって、決まりの悪い思いをする。
南西に向けて張り出されている硝子の壁は、左下部からうっすらと白み始め、朝と夜の極地に細く薔薇色や水色の

光を含んで揺れている。刷毛で刷いたかのように西の岩肌が黄金色に染まるのも、もうすぐだ。いつの間にか、鳥の声も聞こえている。

そして、次の瞬間だった。

さあっと、白晄が部屋の中に切り込みを入れた。一瞬で、照らされるものと照らされぬ空間を作り出した陽の采配。曖昧に部屋の中を漂っていた全ての物に、くっきりとした形が与えられる。

飛び込んで来た陽の刃に、三人は暫く目を細めた。が、やがてシュラが、反射で白く濁る硝子を見遣りながらイルベスに言った。

「丁度いい。今日の定例報告会議にお前も出席しろ」

イルベスは打たれたように顔を跳ね上げると、シュラを見上げて反駁の為に口を開きかける。が、それもすぐにhematiteの鋼で打ち付けられ不発に終わった。

依存はあるまいとの睥睨に、アルデバランも何も言えない。

「射手座の事はその時ゆっくり話してもらおう。邪魔をした」

最後の言葉は宿を借りた礼だろう。山羊座はもう一度イルベスの頭を睨め付けると、威厳を持って退出した。

残された人間は一気に緩んだ気に、肩を下ろす。

「しょうがないな」

口惜しげにマグカップを見下ろすイルベスの肩を、アルデバランは息を吐いてポンと叩いた。

鋭く切れ込んだ朝陽は、今ではすっかり落ち着き、薄く軽いレースが漂うようなものに変わっていた。日中の陽の強さは変わらないが、こんな朝の中に秋への気配は隠されている。

サガは空席に気がついた。
射手座の姿がない。
丈高い者たちが互いの間を縫って次々と着席する中、見慣れた者の姿が見えない。
遅れているのか？　だが、もうそろそろ時間ぎりぎりだ。
ちらほらと、折衝者や監視者の中で気付く者が出始めているようだ。近くの者に未だ空席の椅子を指している姿が見える。
定例報告会議とは、世界に散らばる聖域関係者のうち在域者、帰還者が一同に会し、情報を交換しあう週一回設けられている席の事で、聖域に在する白銀以上の全聖位号保持者の列席が義務づけられている。他に、関連地域の処理官や、教官、情報収集に熱心な一兵士など、参加者は様々である。
二段の擂鉢状の室内の中央部に、位を拝する者が着席し一つの鉢を形成する。その輪を包み込むように二段目の緩やかな鉢がぐるり半円を描き、一般公開席のような役割を果たしている。
聖域は、聖闘士と云う非現実的な能力を持つ体技者を養成することを第一の存在意義としている。が、近年、そう、ここ百年という時間の流れが生んだ変化は大きい。
科学の発達は彼らの存在を白昼の舞台に引きずり出し、これを問うものとなった。
世界は瞬く間に時間的、空間的堤を食い破り、あらゆる孔から文化や、思想、欲望や、善悪が流出し、混沌と無理解と非調和を生み出した。熟成を待てなかったあらゆる思想、あらゆる価値感、あらゆる善意の残骸が書き留める間もなく消し飛ぶ。
聖域は、どうすれば存在を守り続けることが出来るか。
神話や伝承によって結界を保つことは既に不可能である。人は、行きたいところにその足を運んだ。死によってそ

れを阻むこともはや出来ない。人の好奇心は「死」を超え、曖昧であることに甘んじることは二度と無かった。誰もが己が足元にあるものを知りたがり、説明を求めた。

聖域は「神」を信じたが、信仰団体ではない。

聖域は「神」を掲げていたが、それは既に世界によって神秘を暴かれた「神」だった。

暴かれた神秘は、始めから神秘など纏わない箱より始末に悪い。箱には箱としての価値が与えられるが、中身を取り出された箱に何の価値が与えられるだろうか。況やギリシャ神をや。

聖域は決して「ギリシャ神」を御柱とする存在ではないのだが、そのことをはっきりと意識に登らせ生活している者は、聖域内部にもにも極々僅かである。

聖域は、人が神を知る根源、人が神を求める根源、神を神たらしめる原始の姿、それを有するために存在を許された人と場所なのだ。故に抱える神はギリシャ神で無くとも良い。そこのところを知る物が、果たしてどれほど居るだろう。

――何をもって時間の中に存在しつづけるか。

結果、彼らは積極的に世界に参加した。世界に存在を求められる道を選んだ。数千年来保持し続けた、自身が望む姿を保つために、最も効率の良い方法を選択した。

その時々世界に影響力を持つ者から利を引き出す。ごく僅かの人間に価値を認めさせ、所有欲を煽る。一部を所有させ、欲しい形を手に入れる。

聖域は決して己の存在意義を疑わない。万人に存在を認めて貰う必要性を持たない。

依頼者の希望に応えるべく各地に派遣される聖域の「兵」。そこで得た情報は報告され、分類され、新たな利用を待つ。人を持ち、社会を形成し、独自の賞罰の法をもつ領土を持たない連帯組織は、情報と人に柱を与えた。

聖闘士とならない人間でも、その運動能力は高い評価を得ている。各国の軍、特殊部隊の精鋭が聖域の養成課程に参加する事も近年は見られるようになった。常に高品質の「商品」を提供するために、有限の資源を極限まで利用する。

その要を担う十二人の将に抜擢された一人の姿が見えない。

聖域を不在にしているはずは無い。まだ聖域外の仕事を担える程世界は甘くない。

病か？

しかし、余程の大病でも無ければ欠席など出来まい。

位に価値が有るのではない。己がこなした責任と実績に価値があるのだと識るサガは焦る。

いくら巨大な力を身に有そうと、若年であり体躯が未完成である事がどれ程この社会で不利に働くことか。決意を持って、袂を別つ道を選択したが、他の黄金の表情を盗み見て臍を噛む。

徹底した個人主義。

ここで射手座が、どれ程の失態を演じようと、彼らには痛くも痒くも無いであろう。サガは祈る思いで射手座の到着を待つ。

彼を憎んで拒絶するのではない。

彼に希（ねが）うものが在るから離れたかった。

誰が何と自分を評しようと、自分にこの聖号を受ける度量が無いことは自分自身が知っている。双子の弟に受けて貰いたいとも願い、実際そう口にもした。だが、心から値しないと念うその奥に、なんとしても得たいと叫ぶ浅ましい自分が居たことを思い知らされている。

弟に、と希う心は手の届くところに、ともがく執着の変容である事を痛烈に思い知らされた瞬間だった。

半年、苦しんだ。半年、髪を掻き毟るように救いを求めた。

射手座に、「自らの望む理解」を求めた。
何の矛盾も無く射手座を拝した彼に、押さえの効かない憧憬が走る。
彼は一生黄金聖闘士として生を終えるだろう。けれど自分は、自分は一体いつまで黄金聖闘士として存在出来るのか？
雨に濡れて建つ、灰色の施設が忘れられない。そこで見た人々の姿態が脳裏から消せない。
サガは瞑目して息を吐いた。
進行役が始まりを告知した。
目蓋をこじ開け、意識を無理矢理報告者の言葉に合わせる。
報告は、バルト海沿岸諸国の動向から始まろうとしていた。

その時アイオロスは、小屋の裏手に聳える岸壁の頂きに腰掛け、「無断欠席」という結果を生んだ自分の行動にぼんやりと思いを馳せながら空を見上げていた。風が真正面から吹き付け、海に向かって後方に走り去る。
黄金聖闘士となる事に、特別目的が在ったわけではない。息をするように当然の事だった。巨大な力も、苦労することなく己の中から湧き出て来た。全てが揃っていた。生きていく為に必要な事は全て。生命を維持する為に必要なことは全て。
アイオロスはまだ知らない。生きると言う事が、ただ時を過ごしていく事ではないと言うことを。もし、生きていく環境、歩いてゆく道、表現する思考を、自分自身が認識し、確認し、納得し、掴み取る事を繰り返したなら、その先にどんな風景があるか、アイオロスはまだ知らない。
そうなる事が当たり前だった、という幽かな認識が、彼の目前に広がる光景をとてもぼやけたものにしていた。

「おや、珍しいのが居るな」
会議場の裏手にある小部屋で控えていたイルベスに声が掛けられた。振り返らずとも、その声だけで分かる。第四十七代牡羊座にして現教皇の、シオン＝李猩音(Li Chao-wong)だ。
イルベスと山羊座のシュラの師である彼は、幻獣(gryps)を配した皇冠で頭を包み、鏡鉄鋼の仮面で容貌を覆っている。表情は見えないが、彼の声音はいつも温かい。
「シオン……」
Chao-wongと発音できなかった彼の友人が、勝手に呼び付けていた名が今ではすっかり定着している。
「ここで待っていろ。今日は五時間もすれぱ終わるだろうから」
シオンの足取りは、なんとなく浮かれているように見える。理由は分かっている。牡羊座の譲位について話を進めようとしているのだろう。起きるであろうやり取りが目に浮かぶ……。気落ちしつつ、イルベスは小部屋と会議場を仕切る厚い帷の奥を覗いた。
視界端、ぎりぎりの所に双子座の姿が見える。周囲を見回し、本当に彼は若いのだと、妙に納得する。大人の中に、子供が紛れ込んでいる。その子供は、息詰まるほど真剣に、真正面だけを見詰めていた。

ようやく会議が終わったのは、それから六時間後の事だった。午前十時より午後十六時まで。休憩を挟まず一息に進行し一応の決着を見る。指揮官の立場にある者は、今日の報告をそれぞれの部署に持ち帰り、連絡、確認の作業を行う。出席していた黄金聖闘士らも、自宮に戻りそれぞれの麾下に指示を出し、処理をし今後の予定を組み直す。成すべき事は山とある。よって、場は慌しく解散となるのが常なのだが……。
サガは、聖位取得者が退室する際に通り抜ける控え室に足を踏み入れ息を呑んだ。その、帷を押し上げた右腕が止

まっている。
狭い小部屋に、金牛宮、巨蟹宮、魔羯宮、双魚宮の主たちが顔を揃え、さらには真っ先に退場したはずの教皇までが立ち止まっている。驚きに息を止めるサガの眸が、さらに大きく見開かれた。
「ムウ……！何故貴方がここに？」
座の中心に、小柄な青年の存在があった。彼はサガに見出され視線が合うと、困ったような表情を浮かべて
「お久しぶりです」
と会釈を返した。
「双子座、これから今日無断欠席した射手座の事と、合わせてそなたとの事を話し合うが、どうする」
猩音の言葉に好奇の視線がサガの身に集まる。
表情の見えない教皇の面をながめて、サガは平坦な抑揚で答えた。
「同席します」
「では七人分だな。夕食を用意させる。気楽に始めよう」
猩音の明るい声だけが、乾いて部屋に吸収された。

彼等が通された部屋は教皇宮は青金の間で、ここは諸外国の貴賓を遇す際に開かれる黒曜石の間と異なり、教皇とその親しい者たちに使われている明るくこざっぱりとした部屋だ。薔薇大理石の床に同じく、トルコ石と金で象嵌の施されたテーブル。上部が半円を描く細長い窓。天井はトルキッシュ・ブルーとを基調とした幾何学模様が焼きタイルで描き出されている。どこかアラビアを思わせる内装だ。
燭台が蜜蝋を支えて優美な金色のカーブを描き柔らかな光を投げかけ、海の幸をふんだんに使った料理の香ばしい

かおりが部屋を暖めているにも関わらず、照らし出される人の顔はどれもその色に調和しない色ばかりである。
黙々と食事は続く。
猩音を上席に左右に三人づつ。右から双魚宮、魔羯宮、イルベス、それに対して金牛宮、巨蟹宮、双児宮と座している。
ユーレニアは優雅に、シュラは厳格な態度で、その横のイルベスはほとほと居心地悪そうに、咀嚼の動作を繰り返している。
アルデバランは丁寧に食後の酒を断り珈琲を、Sageはブランデーを、サガはクィーンズを給仕に希望する。
黄金桂の香りを楽しみながら、猩音は全員に一服品が配られるのを見届け「さて、」と言った。
「まずは簡単な方から済ませてしまおう。双子座、」
すっとサガの視線が猩音の前に伸びる。
「何やら射手座と面倒を起こしているようだがどういう事かね」
猩音の声音はあくまで軽く明るい。が、声に篭る覇気が真実のみを求めて部屋に走った。カップに零れた猩音の言葉を眸で確認すると、サガは両手を組んで腿部に乗せ、伸ばした背筋のままに猩音に返答をした。
「物心つかぬ頃より一括りに扱われて参りました。黄金聖闘士という責を負うにつきこのまま互いに甘える関係を続けたくない、と考えたので、周囲の方々には奇異な事と映るやも知れませんが、距離を置いて接しています」
「それでは質問だ。これは双子座一人の問題か？」
「私と射手座間での問題と認識しております」
「ではまた質問を。二人の問題であるならば、双子座、お前は射手座ともこの件案を討議しているのだろうな」
Sageは左半身がすうっと冷えるような錯覚を覚えた。問答するサガの表情は毛ほども変化していない。が、冷気を感じる。怒りというより殺気に近い感情だ。ごくごく微量で、隣に座っていなければ、自分のような霊（特異）体質

でなかったらば、気付かないだろうと断言できる。Sageの尻が椅子の上を擦って僅かに右に移動した。この冷たい感情こそ、彼の苦手とするものだからだ。

「どうかね？」

「……私の一存です」

「ふむ。さて、お前は賢い人間だ。先のお前の主張が本当に答えだった場合、私の言いたい事は分るだろう？　射手座と話を。十分に話し合い、合意点が得られた上で、またもしくは射手座が話の席に付かない場合に、なお射手座が不甲斐無い真似をするのであれば私の方で処置しよう。だが現時点で、非礼であり甘えた行動を取っているのは双子座、お前の方だ。私はあくまでお前が先の主張を通すと意志する場合、射手座への謝罪と反省を求める」

　一座は水を打ったように静まり返った。それぞれ泰然とした面持ちでいるが、真直ぐな背筋に緊張の色を見つけることは難しくない。ふと、ユーレニアは斜向かいに座すSageの異様を目に留めた。さりげなさは装っているが体をなるべくサガと離し、顔を背けているのが分る。ユーレニアの柳眉が顰められる。彼は猩音を振り返り、会話の流れを変えようとしたが、一髪、間に合わなかった。

「仰せの通りに」と答え、軽く頭を下げたサガに猩音は息を吐いた。

「私は、もしと言ったんだがな。もし、お前が言った事が本当なら、とな。また、これも言ったな。私はお前がとても賢い人間である事を知っていると。だからお前がさっきのような孔だらけの屁理屈を本気で使ってくるなぞ到底信じらぬ。私には孔だらけのシートで非難も手落ちも何もかも“そこ”で止めているように見える。お前の“本当”の理由を守る為にね…違うか？」

　橄欖緑の眸と沈黙が猩音に返される。猩音は短く息を吐いた。

「何としても本当のところは言いたくないか、双子座」

「言いたくありません」
あっさりと猩音の勘ぐりを認めるような発言と激しい拒絶の篭った言葉に、誰もが息を飲んだ。面に上げられたサガの表情にイルベスは胃に冷たいものを感じる。
「私でなくとも良しとしよう。誰かに、特にアイオロスに話してみる気はないのか？」
「一切ありません」
はっとした。
ユーレニアはその時確かにサガの眸の中に剣呑な鈍光を見た。
「では後は双子座に任せるとしましょう」
咄嗟に会話に割って入り纏めてしまった。
猩音はユーレニアに物問いたげな視線を投げかけてきたが、特に何も発さなかった。一方のサガは、ユーレニアに硝子玉のような眸で一瞥を投げると、視線を中空に留めたまま全く座る事に専念し、先ほどのやり取りには興味を失っている体に見える。
横目で一座の者を確認するとシュラとイルベスの視線にかち合った。
人間には二通りあると、ユーレニアは考えている。
人前で咎められても頓着しないものとそうでない者。
深情の在処（ありか）を公開できる者と出来ぬ者。
後者は当人の意に添わず強引に、または無頓着に、そこの箇所に爪を立てられた時、二度と同じ人物に心を許そうとしない。心を許さないだけではない。攻撃的な感情を持ちうる事が多々ある。
ユーレニアは人の上に立ち、これを使う立場にある事から、こういった事柄に対して敏感なアンテナを張り巡らせ

ているつもりだった。
サガは、一対一で対峙するのはいい。しかし、複数の人間の中で彼の至らなさを暴くのは得策でない。
端的に言うならば、サガは恥をかく事に決して馴れない型（タイプ）の人間だ。
自の腹を他人に暴かれる事に怒りを覚える型の人間だ。しかし、かといっておざなりの親交に重きを置いてもいないのだ。悪戯に触れるには性質が悪い。
ユーレニアは猩音を思う。一本気で、表面的な社会儀礼や鼻息を窺う事に時間の無駄を感じる彼の行動はいつもストレートだ。思索・思想に耽る事はとうの昔に親友に任せ切りで、細かな事に注意を払うのを好まない。希望を絶やす事無く、常に完全燃焼で今を生きる者だからこそ、ここまで聖域を担って来れたと分ってはいる。しかし傍で見ていて時々ひやりとすることがままあるのだった。
自らの持ち得ない感覚について、人の神経は驚くほど鈍い。猩音の明朗な剽悍さと、サガの冷えた鋭敏さ。これが後の障りになるなど一体たれが、どれだけの慧眼を持ってすれば予言出来ようか。
「では、今度は射手座の事だ」
切り替えの早い猩音が言いやった。
「確認しておくが、今日の欠席は誰も聞いていないのだな？」
一座は無言を持って「是」を表明する。ただイルベスが「済みません。今朝は彼が目覚める前に出てきてしまったので……」と小さく発言した。
「さて、昨夜遅くにイルベスを彼は訪れた。理由は特に無い。食事の前に使いを出した使者によると人馬宮は無人であったと言うことだ。今頃帰宮している可能性も無いとは言えないが、許可無くして一日人馬宮を空けた事は事実だ。これをどうするか？」

すっかり冷めたエスプレッソを口元に運びながら、まずシュラが口火を切った。
「厳重に処す事を希望します」
「厳重とは？」
「体で覚えて貰うでも、降格処分でも」
「えっ?!　それは行き過ぎと違うか？」
Sageが慌てて会話の中に入ってきた。
「せいぜい三〜四日の謹慎とか、定款の清書とかで十分じゃん」
「射手座は個として罰せられるべきではない。彼は公共の見せしめとして罰せられるべきだと言っている」
「あんたって本当に陰険な！　オレは絶対に何か人に罰をやるんならそいつがやった失敗以上のものはやるべきじゃないと思うね！」
「違うな。人間は立場で己の蒔いた種の重さは異なるものだ。黄金という立場の責任を引き受けたのなら、それに見合う結果を出すべきだ」
「それはオカシイ！　立場なんかでやっちまった悪さの重さが変わったりなんかするもんか！　五グラム分の悪さをしたら五グラム分償えばいいんだ。人間が変わるごとに十グラムになったり一グラムになったりしてたまるかってんだ！」
シュラの光沢のある青みがかった両眼が、呆れた色を含んで真正面のSageを捕らえた。
「何がおかしい。盛りのたった洟垂らしが暴行を働くより、悪事を取り締まる事を誓ってそれで生計を立てている警官だのが暴行を働いた方が天秤の棒は下がる。こんな事は世の習いの初歩だ」
Sageはつい先ほどまで右に寄せていた体を垂直に立てて

「そんなの五グラムに毛一本生えたか生えないかってなもんだ」
と切り返す。
「いや、山羊座の言う程の厳刑はどうかと思うが、蟹座の言った処置ではやはり無理があるように思う」
金牛宮の太い声が加わった。
「罰の重さ云々より、何がまずかったのか、そこを明確にして、必要ならば公表もして、けじめが付けられればそれで落着なんじゃないだろうか」
まるで競のようだな、とサガは感想を抱いた。山羊座が最上限を提示し、蟹座は最低限を指し示す。その中間を、金牛宮がうまく拾って、
「では、無断欠席の事由を書いた始末書の提出と向こう三ヶ月の減俸。割合は二割。これを集会場の保全にあてて――談話室の壁が一部剥がれ掛けているので――この裁決は公開文書として諸事の項に閉じるとする。また今日の報告内容については自力で収集に当たる。以上で如何か」
魚座が具体案を出す。
「そして、その報告は双子座にやって貰う事にしよう」
猩音だった。
彼は笑んでサガに尋ねた。
「君には何か意見はなかったのか」と。
サガは無い旨を答えたが
「何ゆえ私が伝令に？」
と問うた。

「そうすれば君の方も今日で決着（けり）が付くであろう」と猩音は返す。
サガは、「仰せのままに」と目礼した。
静観していた面々は、事は終了したと判じて腰を浮かした。

サガはイルベスと共に旧道を下っていた。これから幼い頃に寝起きしたイルベスの診療所に向かうのだ。吐く息は白く、星影は淡い。時々砂利を踏み敷いて尖った音が出る以外、音も何も無い。
サガは円やかな容貌で唇を閉ざしていた。胸中を容貌の筋肉に反映させない彼の特性は、いっそその表情が静かであればある程激しい葛藤の中にあると知れる。
これからアイオロスに会わねばならない。彼の頭蓋骨の中では幾つもの計算と答えが弾き出されては消えていく。風が紙片を巻き上げるような速さでそれをやっている。呼吸が静かに浅い。
衆住地区へ出るとき、儀仗兵に使い札を示す。イルベスのものは仕舞われ、サガの元へは写しを取った後判を押されて返される。
迫持（arch）を潜り衆住区に最初の一歩を踏み入れた瞬間に、サガの表情は一変した。
歯がしっかり噛み合わされた事で唇は硬く面に引かれる。双眸はくっきりと見開かれ、眦にまで力が満ちている。ふわりと背骨に入った息が彼の背を大きく見せる。
その姿、凛然にして真摯。
「貴方は一体誰なのですか？」
一心に前を見詰めたままで、サガはイルベスに尋ねた。
「次期白羊宮です」

俯き加減で歩いていたイルベスは、ちらとサガを見遣って短く答えた。
「そうか…」
吐息に乗せてサガの声が耳に届いた。が、それ切り二人は声を出さずイルベスの庵まで歩きつづけた。

アイオロスは、開き戸の開閉を確認していた。弁柄色の壁に十八世紀イギリス風の装飾台が角を出し、その上に食器棚が取り付けてある。その食器棚の観音開きをアイオロスは先ほどから弄っている。蝶番が固くなっていたので油を注して見たのだが巧くいかない。首を傾げる。ムウに書置きされた薬草棚の掃除と物置小屋の屋根の修理は終わり、やる事が無いのでこんな事をしている。置手紙でも残して自宮に戻ろうかと考えたが、直接礼を言うのが筋と、こうして時間を潰して帰りを待っていた。
今度は巧くいった。
満足の溜息を漏らすと、次に彼の手を必要としているものを物色し始める。と、その時、表に人の気配が生じた。
扉が押し開かれ、部屋の明度が一寸下がった。
「アイオロス！　その格好はどうしたのですか！」
ムウの上擦った声にサガは部屋の中に視線を走らせた。
目を丸くしてこちらを見ている傷だらけの姿があった。サガの唇が驚愕に僅かに開く。
上半身裸で、そのあちこちに赤黒く変色した擦過傷の後が走っている。左腕上部に血止めの薬草と包帯。出血が多かったのと巻き具合が緩かったのだろう、布の最表にまで血が滲んでいる。ズボンも……あちらこちら毛羽立ち孔が開いていた。微かに黒い染みが見えることから、下肢にも出血があったのだろう。けして弱い布生地ではない連合国軍の対ゲリラ戦時の制服であり、織りに工夫が施されて穿きやすくはなっているが、元はテント地である。何がどう

なればこのような状態になるのか……。
素早く中に入ってアイオロスの体を点検し終えると、ムウは出鱈目に巻かれた包帯を引き剥がし、傷を確認すると息を吐いた。
「随分と潔く消毒されましたね……」
戸口のサガに目を奪われたままであったアイオロスは、二度ほど首を軋ませながらムウの顔を見る。目尻が心なしか上がって見えた。
「あ、泥や岩屑が入り混んじゃってたから……」
だからタワシで洗ったのだと、アイオロスはムウに告げた。処置としては正しい。だが……傷が残るだろうな、という言葉がムウの鳩尾で尖った石ころの形をして揺れた。
傷から目を背けると化膿止めの湿布を施し、きつくも無く、緩くも無い、丁度いい具合に包帯を巻き終えた。
サガは、アイオロスを目に留めた瞬間こそ驚愕に我を忘れたが、今ではただ真直ぐと橄欖緑の視線を彼の傷に向けていた。
アイオロスも、緊張に揺れる眸を精一杯凝らしてサガを見詰めている。
手が止まり、二人の姿形を目に留めたムウはアイオロスの肩に手を添えると「サガが話があるそうです」と言った。そして、そっと部屋を出た。

二人だけが残された。押し開かれたままの戸口に立つサガの背後に、四角い夜が見える。
部屋の中は洋燈で明るく色付けされ、たった今巻かれたばかり包帯が眩しく白い。
包帯を巻替えた時に無理矢理腰掛けさせられたアイオロスは、サガを見上げて「腰掛けないか？」と尋ねた。

「結構だ。直ぐに失礼する」
何も動かない。風の音も、虫の羽音もしない。アイオロスの脳裏に蘇る光景が、彼の肺を再び圧迫する。瞬きする事にも勇気を必要とするのは何故だろう。
いつも口を開くのはサガだ。記憶の中でも、新しい記憶となる今も。
「今日、教皇宮で黄金位が集まり食事を共にした。その席で、射手座との関係の調整を申し付かった」
アイオロスの頬が痙攣した。
「私は、以前のように、射手座と行動を共にするつもりが無い。何かを語らうつもりも無い。その事をはっきり伝えに来た。いつまでも射手座が力落しているのが私の所為だと判ぜられるのにはいい加減に倦む」
食い入るように見開かれたアイオロスの眸の奥で、言葉が吹き荒れる。何人もの人に聞かれたのは自分とて同じだ。好奇心に晒され、時に比較され、愛想尽かしを食らったのではないかと言外に臭わせる人に、曖昧な態度で親友の名誉を守った。一方的に理不尽な真似をされていると、思わなかった訳ではない。しかし、そこにきっと何か理由があると信じたからこそ、何もサガの事を口にしなかった。サガが口さがない人々の餌食になるような真似だけはしなかった。
言葉は、嵐の中の雨粒の数だけ降りしきる。
「今日のように射手座が無断で会合を欠席すれば、必ず私が引き合いに出される。射手座、貴方にしっかりして貰わなければ私が迷惑をする」
サガは傲然とアイオロスを見下ろし告げた。
アイオロスの眸は、なおも見開き続けたままサガを凝視していた。余りにもその限りに、あまりにも長く、見開かれた眸は膨張し音を立てて砕けてしまいそうだった。

僅かなりと心があれば、そんな眸に見詰め続けられる事に耐えられるものでない。
サガは外を伺うように視線を外すと、アイオロスの怪我を尋ねた。
アイオロスの喉が鳴った。生唾を飲み込んだのだ。それと共に瞬きも二度。ゆっくりとした瞬きだった。息を吸って弾みをつける。やっと言葉が喉から押し出された。
「空に、近づいて見たくなって、スターヒルに登った。帰りに、調子に乗って跳躍に失敗して、叩きつけられた」
再び喉が鳴った。首が錆付いているような動きで、頭を支える角度を変える。アイオロスはサガから視線を外した。
一方、今度はサガが目を見開く番だった。もしやの看取にアイオロスに正した。
「まさか、今日の会を失念していた訳ではあるまいな？」
狼狽は声に僅かに色を付けていたが、俯いていたアイオロスは顔を上げて謝罪した。
「ごめん。忘れていた」
サガの顔が歪んだ。アイオロスはそこに怒りの色を見、慌てて立ち上がると、きちんと頭を下げて謝った。今覚えたてた言葉を使って、「迷惑を掛けて済まなかった」と。
サガは唇を引き結ぶと強い眼差しで言い捨てる。
「謝罪は結構だ。今後の射手座が二度とこのよう愚にもつかん事をしでかさなければそれで結構！」
言葉が終わるや否や、サガは扉の裏に姿を滑り込ませ、アイオロスの視界から消えた。
残るのは夜を押し留めた扉ばかり…。
高い扉の閉音に、ムウが飛び出して来た。
「どうしたんです？　……サガは？」
一人立ち竦んでいるアイオロスを見つけて、ムウの言葉は止まった。扉を見て立ち尽くす少年の背中。

背中が動いた。背中は隅の椅子に掛けていた上着を取ると、襤褸布と化したそれをすっぽり被る。
「ムウ、人馬宮に戻るね。一晩止めてくれて有り難う」
背中が折れ、引き戻される。傷だらけの腕が扉を開き、少年の後ろ姿は扉向こうに去っていった。

アイオロスは泣いていた。星の照らさない道を一人で歩き、歩きながら泣いていた。口惜しさが、滲んで滲んで涙に洗われる。足を交互に動かしながら、決意を抱きながらアイオロスは泣いて歩く。

サガも歩いていた。笑いながら。震えながら歩いていた。闇が彼を取り巻き、サガの腕はその闇を引き千切りかき回す。足は闇を引き摺り、巨大な蛇を大地に繋ぎ停める。
白銀の髪が歩を進める事で捲られ流れる。
その感触が、サガに一つの幻影を見せる。
胸にずっくりと埋め込まれた本のページが、風に煽られバラバラと捲られる。
バラバラ、バラバラ、バラバラ、……。
装丁が外れた。紙が、銀髪振り乱して歩くサガの漆黒の背景に散らばる。
誰にも知られたくなかった事。決して弟に見せないと誓ったもの。
それが散る。
バサバサ、バサバサ、バサバサ…
怪鳥(ぬえ)が嬌声を上げる。
全てのページが吹き飛ばされて、サガの笑いも震えも止まった。

怪鳥の一聲。
圧して迫る黒い風塊。
サガの体は微塵に消し飛ぶ。
サガは歩を止めてた。
意に満たない決断が、冷たい希望で体を満たす。ページはばら撒かれず、胸の衷に収まり続けている。体は塵芥にならず二本の足が支えている。
そして、薔薇色に広がりゆく見事な朝焼けの中にいる。

サリッ、
一歩。

サリッ、
また一歩。

魂を食われた少年が歩く。
銀の髪間から闇の破片を零しながら。

十月、十一月と、時は慌しく過ぎる。
この頃にはもう射手座と双子座の不和を取り上げる者もなく、二人はそれぞれに己の職務を果たしていた。
アイオロスの元にアトゥーイという宮付の右腕が配されたのもこの時の事だ。
歳はアイオロスより九つ上。
九つ年下の少年に、アトゥーイは完璧に仕えた。拝礼、言葉遣い、日程の管理、人馬宮の維持。
けして表情を崩さず、隷従の姿勢を取り続けるアトゥーイに、アイオロスは居心地の悪さを覚える。
アイオロスは，アトゥーイに言葉遣いや恭順さを和らげてくれるよう七度、頼み込んだ。そうして八度目に、
「安易に他人を自分好みに仕立てようとなさいますな。私の恭順に自身が相応しくないとお思いなら、まずはご自身を見合いになるよう仕立て直されるべきでは有りませんか」
痛言であった。
アトゥーイはロム（ジプシー）の生まれで、豊かに縮れた漆黒の髪と翡翠の眸が印象的だ。そして、右腕の肘から先が欠けている。
初めて引き合わされた時、あまりにも不躾に敵意をぶつけられアイオロスは酷く戸惑った。その眼差しが、敵意ではなく、値踏みのそれであると気付いたのは何時であったか。
教皇宮の蔵書室で過去記を閲覧している時、ふと一つの傷害事件が目の端に止まった。その時であろう。
三年前、衆住地区の仮設闘技場で、当時鷲座の白銀聖闘士は確実と目されていたカラードの青年が、その利き腕を切り落とされたと載っている。現場に犯人の遺留品は何も残されておらず、事件は解決されぬまま終結していた。
カラードの名はアトゥーイ。

アイオロスは瞑目した。彼自身が肌で感じたことは一度も無いが、有色人種や移民、放浪の民に対する差別はここ聖域にも厳然として存在していた。

現教皇の猩音は中華は漢民族の出色だ。彼はけして公衆の目前で鏡鉄鋼 (Speculator-hematite) の仮面を外しはしない。

蒙古の騎馬民族の出色である天秤座は東の霊山より動かず、アイオロスすらその姿を知らない。

正式に聖位を授受されたもののなかに、アイオロスは二人以外の有色人種を知らない。

アトゥーイの眼差しは厳しい。アイオロスには、自らが黄金の聖号に相応しい者か否か、美しい緑の髪の下でアトゥーイが冷評を下しているように思えてならなかった。

気を張る生活だった。

「火」の折衝の古参者であるエティアスとボアズから受けるショックも、アイオロスに立ち止まることを許さない。

勢力旺盛な折衝者たちは惜しみなく聖域と外界を行き来し、やっと十四になるかならぬかの少年に、容赦なく世界を叩きつける。

その年の秋、フィジーではクーデターが起こり、チベットでは仏僧侶が独立を掲げてデモを起こし死亡者を出した。イランはリベリア船籍のアメリカタンカーをミサイル攻撃し、ニューヨーク株式市場では株価が大暴落（ブラック・マンデー）した。クウェートの石油基地はイランの攻撃を受け、ソヴィエト共産党書記長は革命七〇周年式典でスターリンの批判を行う。日本の天皇は病に倒れ、ルーマニアのブラショフでは食糧不足から反政府デモが暴動化し、市庁舎などが襲われた。

第二次世界大戦後の冷戦から生まれた地図が塗り変わろうとしていた。東と西の壁が打ち砕かれ、新たに国ではなく、民族の紛争が燃え上がろうとしていた。

「この世には二つの国しかない。人間が線を引いて作った国とそうでない国だ」
と、言ったのはたれであったか。
人間の世界は細かく細胞分裂の爆発を繰り返し、細胞膜に囚われない“電子網”という菌がぐるりとそれを覆い始めている。
ギリシャには、冬が訪れていた。

アイオロスは、見入った。
小さな頭、小さな手、小さな体。
なんて全てが小さい…。
目前に腰掛ける、骨格の確かな、陽に焼けた女の胸と腕の間にすっぽりと収まっている。
目はもう見えるのか？
見えるのだろう。時折アイオロスの方を、それは透徹った眼差しで見詰めてくる。見詰めては、自分を抱き留めている女を見返し、空中をじっと見て考えているような仕草をする。
赤ん坊とは、なんと奇妙なものだろう…。
十二月九日、アイオロスは己の「血族」を初めて見た。

その日、空は冷たく灰色に光っていた。

人馬宮は午后になって、教皇宮よりの使者を迎えた。使者の旨をアトゥーイが、執務室のアイオロスに伝える。

その命、「二時間後、教皇宮へ出向願う」。

アイオロスは開いていた資料書から顔を上げた。

「何だろう」

アトゥーイの翡翠の瞳を見上げて呟く。

「私には分りかねます」

アトゥーイも真直ぐにアイオロスの瞳を見返した。

「そうだよな」、ついっと視線を横に移してアイオロスは呟いた。溜息が少し、混じっていたかもしれない。アトゥーイの恭順に、アイオロスは未だ馴れない。身に合わない服を無理矢理着込んでいるような落ち着き無さがある。服に合うよう成長すれば、この気持ちは消えるのだろうか？　その時が来てみなければ知りようの無い疑問が今日もまたアイオロスの胸を去来する。

大神殿に設えてある執務室より幾分こじんまりとしているこの部屋は、書棚にも、家具にも空間が目立つ。

在任半年を経てやっとアイオロスの目に馴染みだした自宮の執務室。その端の方に視線を飛ばすと、アイオロスはアトゥーイに「後一時間半経ったら教えて」と言うと再び紙面に目を落した。アトゥーイはアイオロスが黙読始めたのを確認してから、くるり踵を返すと自分の机に戻って行った。

「お前の弟だ」

教皇宮の私室にアイオロスは通された。

一辺七呎 (feet) 程の小さな部屋だった。

入った正面、南に一つ大きな窓が刳り貫かれている。窓からは、桑の木が見える。葉が黄色い。昨晩降った雨のためだろうか、樹皮の色が清々しい。

窓から目を外すと、東の壁に置かれた一脚の椅子。そこに一人の――年の頃三十半ばであろうか、強い陽に照らされ続けた肌は実際よりも歳いって見せているかも知れない――女性が居た。腕の中に、赤ん坊を一人抱いて。

床に足を縫い留めているアイオロスの背に、教皇、猩音の手がやさしく添えられた。

その手に押されて、アイオロスは女の正面の席に腰を落した。次いで猩音が、彼の側に腰を下ろしたのが気配で知れる。が、アイオロスの眸は、目前の二人に囚われて動けない。

猩音の丸い声が右耳に届く。

「アイオロス、この方はお前の母御膳の妹御にあたる方だ」

アイオロスの目に、深い皺を刻んだ四角い額が映る。額に後れ毛が零れている。髪は黒くて、僅かに縮れているようだった。しっかりとした黒髪は、後ろでひっつめられている。顔容は彫りが深く、額と鼻梁とでくっきりT字を支え、その奥にある瞳は大きく猫柳色をしていた。大きくて、厳しい瞳だと思った。少し鷲鼻気味の高い鼻。その下の唇は薄くて力強い。

自分と似ている箇所があるだろうか？

アイオロスは女の顔を凝視する。

「腕の中の赤子が、」

視線が女の顔から布にくるまれた小さな生き物に移る。

「お前の弟だ」

アイオロスの眼にぐっと力が入った。首が、女の腕を覗き込んで伸ばされる。

彼の弟は、深くフェルトの帽子を被り、弁柄色の大きなショールに肢体を包まれていた。支える女の節だった指の間から、腕の下から、ちょろちょろと同じ色の房飾りが零れている。

本当に弟なのだろうか？いや、猩音は決して嘘など付かない。まして、聖域のこのような深奥部に入ってこれたのだ。入域調査とて行っているはずだ。きっと本当のことなのだ。この小さな人間が、自分の弟なのだ。

アイオロスの瞳は、今を映しつつ、脳裏に異なった映像を映し出す…あれは、いつの事だったか…。

ムウの前で、高い椅子に腰掛け、足をぶらぶらさせながら机に向かっていたのを覚えている。五つぐらいの頃だったかもしれない。勉強を、そうムウに何かを教わっていたのだ。大きなテーブルに、サガと並んで腰掛けものを書いていた。その時、サガが小さく声を漏らして　自分の右てを抑えた。

アイオロスは吃驚して隣のサガを見遣ったが、何処にもサガが手を抑える原因が見当たらない。サガは「痛み」に顔を顰めながら、ついっと窓の外に視線を走らせた。

と、その瞬間、ガラス張りの窓の一部が開いてアルデバランがカノンを伴って姿を見せた。

サガは椅子から滑り降りると、戸口の双子の片割れに向かってぱたぱたと走り寄っていった。二瞬程遅れてアイオロスも後を追った。ムウも既にそこに居た。

サガがカノンの「右手」を覗き込んだ。双子の後ろ、いや、カノンの後ろにはアルデバラン、サガの横にはムウが立っていた。アイオロスは、幽かに気後れを感じながらその輪の外からカノンの手を覗き込んだ。

ぱっくりと傷が開いていた。

中指と薬指の間から、手の平の中ほどにまで掛けて、ぱっくりと皮膚が割れ、血が噴出していた。

アルデバランがムウに、木の枝から滑って手が目測を誤ったのだとか…怪我の事由について説明していた。

サガは開かせたカノンの手の平に、己が手を当てて輪気を施す。
カノンの怪我、サガはこの所為で手を抑えたのだろうか？
アイオロスは小声でムウに尋ねた。ムウは、血の繋がり――親子や兄弟――があるの場合、時に感じ取れる事もあると教えてくれた。
その次の日か、それともっと後なのか、アイオロスは小刀を持って雑木林に入っていた。踏みしめる下草に弾力があったことを覚えている。樹木の嫩葉は頼りなくその枝先に萌え出ずり…そうだ、早春の頃だったのだろう…小刀は何かを持ち帰るためだったか、それともムウの目を盗んで持ち出したか…とにかくアイオロスはまだ細い幹の根元に腰を下ろした。草本が柔らかくアイオロスの体を受け止めた。
左手に小刀を持ち、ぎこちなくアイオロスは自分の手を傷つけた。切っ先で切り開いた傷口から、血が流れ出した。目を見張ってそれを見詰める。
アイオロスの前膊に一筋の細い赤糸が生じた。
何を期待していたのだろうか…。
ただぼんやりと傷口を見ながら、思った。
この世界のどこにも、今自分が血を流した事に気付く人間は居ないのだ。
どこにも。
だれも。
いないのだ。
頭の芯がすうっと冷えた。
その冷えた心持が、何という感情から来るのか判らなかったが、寂しく、悲しく、怖い、そんな感じの交じり合っ

たものだったのだろう。ぎゅっと右手を握り締めると、アイオロスは両膝を立てて縮こまった。
「二度とこんな真似はしない」堅くアイオロス腹の底に刻み付けた。
二度としないと刻みつけたのは、何故であったか。何が幼い彼にそんな決意を抱かせたのか。親も兄弟も何者も血族を持たない、知らないアイオロスは、言葉より前に「孤独」というものをこの時肌で感じ取ったのだろう。
けれど彼の天成は、この肌触りを長じて哲学や思想の道への足がかりとすることは無かった。彼は、感情を言葉と言う記号に置き換えることに終生疎く拙かった。

いつまでも腕に抱いた赤ん坊に見入るばかりのアイオロスに、女は深い眼窩の奥にある瞳を光らせて語りかけた。
「貴方の母は私の二番目の妹です。妹の名はソフィア。妹の夫の名はニコス。貴方の父方の祖父の名がアイオロスだったのであなたはアイオロスと名付けられました。貴方はメテオラで生まれ、一歳半まで家族と暮らしていました」
立て板に水を流すかのように、女は淀みなく言葉を続ける。柔らかな灰色の瞳を、食い入るようにアイオロスの顔に向けたまま、女は軽く腕の中の赤子を揺すり上げた。
「この子はリュコン。貴方の母の父がリュコンと言ったから」
女の瞳はアイオロスを、アイオロスの瞳はリュコンと名づけられた「弟」を凝視して止まない。
二人の一種異様な空間を崩すべく猩音の声が割って入った。
「アイオロス、お前はメテオラの僧侶によって聖域に来たんだ。あそこは小さな、静かな町だ。……お前は生まれてから直ぐに…修道院の僧侶たちに知られるところとなった。彼等の瞑想にお前の光は原始の光だった。それで、お前は此処に来た。家族はやがてヤニナに移った。そこで、この子が生まれた」
猩音の声に、アイオロスは息を殺していた事に気づいた。力を入れていた肩が痛い。そして、とても息苦しい。何

故自分は此処へ来たのか。何故親は自分と別れたのか。親という当たり前の存在を、今まで考えてみなかった自分にも驚く。本当にそんな存在が在ったのかと心底驚く。そんなもの、とうに無いとばかり思っていたのだ。自分にも、サガたちにも…。

「この子の誕生日は、八月十六日だよ」

猩音の声がまた聞こえる。

八月――――まだやっと四ヶ月だ。何故聖域にやって来たんだろう？

なんの為に？

何故この子を連れ来るのは両親ではないんだろう？

アイオロスは息が詰まる。

今更、一体、何故？

女が猩音の後を続けた。

「八月の十六日に、妹はこの子を産んだ。とても喜んでいた。待って待ってやっと再び授かる事が出来た子供だったから。大事に、それは大事にいとおしんでいた。けれど―!!　死んでしまった。十一月八日に。殺されたから」

アイオロスは訳が判らず女を見直した。女はアイオロスが気圧される程の感情で瞳を燃え上がらせ、猩音にその炎を投げつけていた。

しかし猩音の声は動じる風もなく、静かに部屋に流れた。

「ハグレが…逃げ込んだ街でニコスを見つけた。ニコスを見て彼は追っ手と勘違いした。ニコスの曽祖父の兄に当たるものが、聖域に務めた事がある。位は青銅だったが、血脈だろう…幽かに見て取れた小宇宙を、"猟人"が気配を殺していると考えた。やる前にやらなければと考え、夜陰に乗じてそうした」

云い終わると猩音はゆっくりと瞬きをした。

静寂の漂う部屋を、女の声が鞭のように引き裂いた。アイオロスは、怒りに歪む顔というものを始めて目にした。

「あなた方が生み出して！　管理出来ずに！　命を奪っておきながら！　なんて言い草！　私は直ぐに知らせたわ！　アイオロスに！　でも！　葬儀に彼は来れなかった！　私は何度も頼んだわ！　連絡を取らせてと！　会わせてと！」

猩音は誰にも気付かれないように溜息を、ゆっくりと細く長く息に変えて吐き出した。彼もまた知らなかったのだ。女の訴状は、全て、最初の窓口で止まっていた。それに気付いたのは、やっと一週間前の事で……その上彼にこの事実が知れたのは全く奇跡としか言いようの無い偶然の産物だったのだ。

彼の肩に聖域の行政機構の有様が重く圧し掛かる。一度灰燼に帰した聖域を、百年掛けて立て直した。巨大になった組織はまるで恐竜の尻尾のようだ。その神経の何と緩慢で怠惰なことか。

「あなた方はこうも言ったわ。甥にはいつ会いに来てもいいと。妹も義弟も、何度アテネに来たことだろう。でも、一度だって会わせては貰えなかった。何十通、何百通手紙を書いたことだろう。でも、一通たりと応えは無かった」

そして女は、アイオロスに軋んで視線を戻した。

「妹はいつも後悔していた。貴方を手放したことを、いつも後悔していた…!!」

アイオロスは、そっと眠る赤ん坊の頬に触れてみた。密な産毛と暖かな皮膚。周囲に比べ細い手だと思っていた指が、赤ん坊の顔の傍に寄った時、驚くほど黒くごつごつとして見えた。

赤ん坊の入った籠（バスケット）はテーブルの上に置かれてある。部屋の主が戻るまで、アイオロスは椅子に腰掛けもせず「弟」という名の赤ん坊を覗き込み、あちこちをつついて待った。強く触りすぎたり、しつこく撫で過ぎると、

彼の小さな赤ん坊は手や足を振ったり、口をもぐもぐさせてアイオロスに意思を伝えた。
微かな寝息に、包まっているショールが小さく上下していた。幸せそうな寝顔だ、とそう思ったとき、アイオロスは幸せが判らない自分に気が付いた。
幸せそうな寝顔だと確かに思ったが、では幸せとは何であったかと疑問がコポリと湧いたのだ。
コポリ、コポリ…水中で水が砂を押しのけて湧くように…コポリ、コポリと…。
慌てて心当たりを探ってみたが、ただ漠然と四方の周囲を見渡すような落ち着かなさしか返ってこなかった。
アイオロスはムウの診療所に居た。
叔母の申し出を断って、教皇の薦めも断って、アイオロスは頑固にこの赤ん坊が欲しいと言い張った。
いや「欲しい」、というより「得たい」という徒ならぬ祈りであったと言うべきか。
教皇猩音はアイオロスに申し付けた。赤ん坊を、外に預けられないのなら、ムウを尋ねろと。
「シオン様……なぜムウの元に行かなければならないのでしょうか?」
散々の押し問答にぐったりとなっている猩音は答えた。
「子供を育てるのは大変な事だ。ましてやお前が今手元に置くのは赤ん坊だ。生半なことでは一人出など育てられん。協力者、理解者が必要だ。お前自身がまだまだ自分の面倒も見れていない。ムウが協力すると言ったら私ももう一度考えてみよう」
納得いかない風情のアイオロスを見上げて猩音は腰を上げた。
「あれが今、一番聖域では閑な漢だからな。それに、一番のベテランでもある。お前やサガたち含めて四人の子育て経験者だ」
猩音はゆったり戸口に向かって歩き出し、アイオロスはその背中を摩られた。そしてその足で、アイオロスはムウ

の開いている麓の診療所に駆け込んだ。
「ムウ……お願いだから……」
大まかに事の次第を話して聞かせるとアイオロスはムウに頼み込んむ。ムウは呆れ返った体でアイオロスの話の後半を聴き終え、今は左手の薬指で眉間を按摩している。
「アイオロス……」
と、ここで盛大に息を肺から押し出してから答え始めた。
「頭を冷やしなさい！　赤子というモノは、本来愛情を媚びる生き物です。貴方が今ここで、それに反応する必要は無いのです」
慌ててアイオロスが二の句を接いだ。
「違うよ、ムウ。そうじゃない……」
ムウは目を細めてアイオロスを見遣ると両腕を組、今度は凛然とした口調で話し始めた。洋燈に照らされて、処所に貫乳走る蘇芳色の塗料も剥がれかけた草臥れた壁に、ムウの影が伸びてアイオロスへの威圧を倍加する。
「では、ご自分の立場を思いなさい!!　貴方はしかるべき施設に赤ん坊を預け、機会を見て会いに行けばいいのです」
冷ややかな二の紫水晶にアイオロスの言葉は詰まった。
「貴方は今、とても不安定な権力を手にしているのです。その力が通じるは僅か、この聖域のみ……けれど、負わされた責任は大きい。貴方の命一つでは払い切れない程大きい……。他に心を割く余裕など何処にありますか？」
ムウは知っている。三ヶ月前の会議への自主欠席と宮の守りを不在にした一件が、予想外に下に広まっている事を。アイオロスの同僚たちが決して水に流した訳ではない事を。
時を同じくして黄金となったサガが順調に事を処理しているだけに、アイオロスへの評価は辛いものになりやすい。

宮付きの従者に角のある態度を取られているとも耳に入っている。そういった細かな一つ一つが、多数の上に立つ時、どれ程不利に働くか判らないのである。

サガもアイオロスもカノンも、同じように心を砕いて世話をしてきたつもりである。たれか一人だけが綺羅綺羅しいものになればよいのではない。三人居れば、三人共に、良い目を見させてやりたかった。

手が、アイオロスの手が、ぐっと握りこまれた。力一杯握っているのだろう。関節と腱がくっきりと浮き出している。

アイオロスは項垂れてムウの言を聴いていた。目蓋は伏せられ、目前のテーブルに視線が落されていた。それは、諦めの表情にも見えた。しかし、

「駄目なんだ…」

紫水晶の瞳が軽く見開かれた。言葉を発しかけた唇が半開きの形のまま凍える。

「悲しくないんだ。両親の死を、哀しい事だと思う。けれど、悲しくはないんだ……」

アイオロスは、両手を目の前にある椅子の背に乗せ、ムウに訴えかけるように言葉を続けた。

「ムウ、貴方の言う通り、彼を余所に預け何年か後に会いに行ったとする。そこで自分は彼に、何を持って兄だと、家族だと、信じて貰うんだろう……」

もし、一目でも合って会話することが出来たなら、血の流れを確認できたならば、またそれを記憶として持っていたら、もう少しあの女性に近づく事が出来ただろうか？

もう二ヶ月も経とうかと言うのに、今もあれ程に強く悲しみ強く怒りを所有し続けている人。

姉と息子。同じ一親等同志……。他人事のようにしか受け取れないアイオロスの衷に、いつか林で手を切って見た時に感じたような悲しみと恐れと孤立感が再び忍び込んでいた。

ムウは、その影を的確に読み取った。そもそも彼にはそんな“感情”こそ必要ではないのだと結論した。だが、

彼が自らの意見を述べる前に、少年が両の拳に力を込めたまま言い切った。
「僕には分からない。ただ、手放したくないんだ。だから、あの子の為じゃない。これは、僕自身の為の、僕の意志だ」

女は、怒りでも悲しみでも満たされた心で言った。
『私は、甥を引き取りに来たのです。お金を貯めました。全部差し上げます。返して下さい』
猩音は困ったように首を傾げ、吐息をついた。人間を売り買い出来るとは思っていません。もしお返しできるのなら、そちらの世界に彼の“受け皿”が、本当に有るのなら、我々は喜んでお手元に戻して差し上げます。しかし、今の彼はこの聖域に誓った人間なのだから、私や彼や貴女の希望でここを去る訳には行かないのだ、と穏やかに、何とか言い聞かすように話をした。
何時間あの小部屋に三人居ただろうか。星が瞬き、吐く息が白くなる頃、三人は女を見送りに外に出た。猩音は宮の端まで、アイオロスは脇門まで、女を見送った。
二人きりになった時、女は言った。
『どうしてもここを離れる気は起きないの？』
両腕に、新しく赤ん坊をしっかりと抱きしめ、ほんの僅か遅れて横を歩く甥に、伯母は低く静かな声で問い掛けた。
『生活の心配はしなくていいのよ。私は独身だし……。もし……気が変わるようなら、直ぐに来て欲しいの……私、癌があるの。そんなに長い事貴方のことを待っていてあげられないのよ……』
アイオロスの首が信じられないものを見るように伯母の顔を求めて回った。見つけけた伯母の顔は、部屋に居た時と変わらず、自分の感情をしっかりと押さえ込み、静かに厳しい表情だった。
『貴方と暮らして見たいわ』

女の笑顔を始めてアイオロスは見た。
初めて女を、「伯母」という概念で捕らえた。
「笑顔」というのは、今まで閉じられていた唇が捲れて上がり、眼形が潰れて頬の筋肉が盛り上がった状態を現す言葉だ。
世に残される「美」を表現する彫像や絵画の全てといって良いものが沈黙の表情で描かれていることを見ても判るように、笑う動作は顔を歪にさせる表現に他ならない。しかし、実際に生きて在る時間の中で、これ程人の心を打つ「歪み」も無いだろう。
人は歪んだ表情を見て心打たれ、文字はそれに何とか「美しい」修辞をくっつける。
曰く、「花が綻ぶような」「輝くような」と……。
そして絵筆は歪みを修辞さしむるものを描き出せない。無形のものを表現するのに、視線に囚われる筆は戸惑う。筋肉が移動し、唇が開き、目が崩れるその時その一瞬に、人間が皮膚の下に包んでいるものが顔を出す。
それを、魂と呼ぼうか。では、女の魂は何であったか。
地味で、静かで、分厚かった。
「伯母さん、」
アイオロスの口から言葉が滑り出た。つるりと滑って飛び出した言葉に、後ろは付いて来なかったが、彼の伯母は彼の頭髪を撫ぜ……撫ぜてもう一度言った。
『妹は、貴方を手放したことを、いつも後悔していた』と。
十年前、林で流した赤い血の雫が、やわらかな花びらとなってアイオロスの心泉に落着し、丸く丸く波紋を描いて幾重にも広っていった。

人馬宮である。

既にアトゥーイはなく、岩間に聳え立つ人馬宮は森として暗い。拉げた形の空は天の四分の一程しかない。月は見えない。

大理石の床ににアイオロスの足音が響く。

広間を抜け、脇廊の細道を進み、階段を上がる。踊場を二つ過ぎ、突き当たりに人馬宮の守人の寝室があった。

アイオロスは、そっと木扉を押し開けた。腕の中で彼の小さな弟は心地良さげに眠っている。

星明りに照らされた部屋は森の中のようだった。人馬宮の主賓室の床は孔雀石(Malachite)で敷き詰められ、白いカーテンを吊るした窓際にはどっしりとした楢の削りだしの机が鎮座している。窓に向かって左手には栓の寝台、右手には桐の衣装箪笥がいずれも具合よく配置されている。

変わっているのは柱だろう。石造りの宮殿には無用であろう、化粧柱と言うには立派に過ぎる角柱が四本、梁がまた同じく四本、石壁に姿を晒している。木は椹(サワラ)。木目がスキッと通り、僅かに香る。椹は軽い木材であるから真に調度品として置かれたものであろうが、部屋に入るとまず森を連想する。そんな魅力を持つ部屋だ。

アイオロスは星明りを頼りに寝台へ進み腰掛けた。

――サガ、弟が来た――

惜しみなく赤ん坊の上にアイオロスの情が降り注ぐ。

――サガ、こんなに小さな指に爪があるよ――

苦味なくサガに向かって言葉が綴られる。その事に驚く間もなく、気付く一瞬もなく、サガに向かって言葉が溢れ出す。

赤ん坊を、その呼吸に合わせて軽く触ってみる。
すやすやと眠るリュコン。
――――サガ、サガ、サガ…――――
いつまでもアイオロスはリュコンを見詰めつづけ、サガに呼びかけ続けた。

アイオロスの弟、リュコンはさながら小さな爆弾だった。
アトゥーイは勿論のこと、エティアスもボアズも彼が“弟”を人馬宮に引き取る事に激しく反対した。他の黄金もしかり。教皇を始め、おそよアイオロスに影響力の在る全ての人間が反対に回ったのである。ここで彼が意を翻さなかったのは、彼の意固地が強かったためであろうか。
そうではないだろう。余りに堅固で頑強な意志表示に、双魚宮の宮主は
「射手座は何者だったのだろうね」
と側近に漏らしていたし，Sageなどはもっと明け透けで、暇つぶしに寄った先のイルベスに向かって
「あいつ、水子じゃなく妊婦の霊でも取り込んじまってんじゃねぇの？」
と言い捨てている。
つまり、彼等の知るアイオロスとは、明るく素直でなかなかな正義感を持った少年であって、頑迷で、己が希望を徹そうとあらゆる手段を取るような、そんな太さは見えない少年であったのだ。
己の意志を徹す。そのためにアイオロスは過去の文献を辿り、少しでも今の自分に有利な記述を目を皿にして探しまわした。公衆食堂の厨房にも顔を出した。たれの元にも足を運び、協力と助力を嘆願した。その間に、赤子の面倒

を見、己の責任を果たして過ごしたのだから驚嘆に値する。彼の行動力の源は枯れることを知らず、熱意とはかくいうものであったかと口を開くばかりの執拗さであった。終にはまず教皇が折れ、よくぞ倒れぬものよと、内心誰もが思い始めたころ、やっとのことで特免状が下った。晩冬、二月初旬の頃の出来事である。

「赤ん坊の顔を身に来た」

もう一月半ばから蕾をつけ始めているアーモンドの花の香りを身に纏わせたカノンが、人馬宮の門を叩いた。

目を見張ったのはアイオロスだった。カノンの方から自分を訪ねて来ることなど今までに合っただろうか。

あの森を思わせる部屋にカノンを案内する。

「ふうん…いいとこに住んでんな」

首の後ろを掻きながらカノンはぼそりと呟いた。

「こっちまで登ってくるのはややこしくてな。…悪かったな今ごろでよ」

ぼそぼそと続けるカノンにアイオロスは破顔一笑して答えた。来てくれて嬉しいと。

部屋の扉潜ると、開け放たれた窓から酔うよう程に清しい風が鼻腔をくすぐる。はためく白いカーテンの向こうに広がる岸壁の数々に、ちらりほらりと名も無い野辺の花色が散っている。

そして直射日光の当たらない、風通りの良い場所に、格子で囲われた四角い小さな寝台がある。全体(ボディ)を椹(サワラ)、格子には一位(イチイ)、四角く囲う手摺には柘(ツゲ)をあしらった一品にはなかなかの趣があった。

「これ、アルデバランのおっちゃん?」

首を斜めに傾けた格好で、ずかずかと幼児用の寝台に近付き眺め眇めた後に一言。

ゆらゆらと頭を揺らしながら中身を物色してまた一言。

「これ？お前の弟」
どれにも「うん」「うん」と答えるアイオロスにカノンは「抱けるのか？」とまた尋ねる。
風通しが心地よいので扉を半開きにしたままアイオロスはカノンの傍にやって来る。と、囲いの中から弟を抱き上げ、差し出した。
「はい。でももう随分重いよ？」
「オレじゃない！　お前がちゃんと抱けるのかって聞いたんだ！」
差し出された赤ん坊を避けるために、上半身を後ろに反らせてカノンは喚いた。きょとんとして、アイオロスはそんなカノンを見ていたが、リュコンの手がパテパテと頬を叩くので、頭を下ろして目線を合わせてニッコリと笑ってやった。赤ん坊の手足が嬉しそうにバタバタと突っ張った。
「そいつ、もう目が見えんのか？」
「見えるよ。ここに来たときから見えてたよ」
「ふうん…」
じわりじわりと覗き込んで来るカノンに、アイオロスはもう一度リュコンを抱かせようとしたが、苦笑のうちに断られた。
「もう喋ったりもするのか？」
盛んにアイオロスの顔に向かって手足を振ってみせる赤ん坊を見て、カノンは喋る。
「まだだよ。でも口を大分もごもごさせていからもうちょっとじゃないかな？」
アイオロスは片手でリュコンを支えながら、机の椅子を引っ張ってきてそこに腰掛けた。カノンも寝台の上にどっかりと腰を下ろす。

「なんか、妙に様になってるなお前……」
「うん、慣れた。でもまだまだ大変なんだ」
カノンは、大変だと言いながらとても嬉しそうなアイオロスの顔を凝視する。
「不思議だな、オレや兄貴や、お前も、みんなきっとこんなんだったんだな……」
リュコンをあやしながらアイオロスも、
「うん。僕も何遍もそう思ったよ」
と応えた。
街に下りると何時の間にか、赤ん坊や、赤ん坊を抱いた母親の姿ばかりが目に止まるようになっていた。どの子供もとても　大事そうに抱かれているのを見ると嬉しくなった。足元を歓声を上げてすり抜けていく子供たち。彼等ももとはあんな小さな赤ん坊だったのだと思うと、元気に育ってよかったなぁと思う。そして、いつかはリュコンもそこらを駆け回る子供等と同じになって――――アイオロスの視線は彷徨う――――中学生くらいになって、大学生くらいになって…次々と様々な年代の人々を目は探し追いかける。
流れていた視線が止まった。またゆっくりと走る。眼差しの先には、老夫婦が、互いの腕を絡ませ合って日向の道を歩いていた。
――――いつかおじいちゃんになるんだ。その時、あんなふうにかわいいおばあさんが傍にいてくれたらいいな――――
そんな事を考え、考えた自分に気付いたとたん唇の端がぶわっと持ち上がった。
おじいちゃんだなんて！
自分が大人になった姿さえ想像できないのに、何を考えているのだろう。
アイオロスは息を吐いた。

ふわりふわりと白いカーテンが風に舞っている。光の通り道を跨ぐとき、その白い生地には酪乳（バター）色の判が押された。　掬い上げられる布地にその回数だけ、型様々な判が押されていく。

寝台に腰掛けて、弟をあやすアイオロスをじっと黙って見ていたカノンが、ゆっくりと口を開いた。

「アイオロス、オレは聖域を出るぞ」

アイオロスの眸が信じられないものを見るようにカノンを見詰めてた。

「聖域を離れる。ペルーに、おっちゃんの伝で折衝者の見習を引き受けてくれる人が居るんだ。そこに行く」

アイオロスは、速まる鼓動を抑えて言った。脳裏に、二人並んで腰掛け話し合っている姿が脳裏に浮かぶ。

「サガは、どうする…？」

「兄貴にはもう話した。昨日の晩、おっちゃんの小屋で」

「違う、カノン！　サガを置いていったら、お前が一人でいってしまったら、サガは一人でどうするんだ？」

呆然としてカノンは呟いた。

「お前…知っているのか…？」

「え…？」

リュコンを抱きしめ、アイオロスは身を乗り出してカノンの容貌を探った。カノンの瞠目の表情は、ゆるゆると苦渋の色に染め変えられていく。その変化が、アイオロスの両肩をぎしぎしと締め付けた。不安という名の圧力が、小さな部屋を支配する。

リュコンンが小さくぐずり始めた。

陽は、天になかったか？

窓からとうとうと流れ込む光はなかったか？

アイオロスの背筋が切れんばかりに攣れ始めた。
部屋が、
暗い――――。
俯き、白くなる程唇を噛んでいたカノンが頭を上げた。
暗澹。
橄欖緑の色はない。眸に在る色はただそれだけだ。
アイオロスの呼吸は一刻ごとに浅くなった。リュコンをあやす腕の感覚が遠い。
「何かがあったんだ」
低く、低くカノンの声が迸る。それは怨嗟をも含んで、溟く熱い。
「おかしくなったのは一昨年の暮れからだ…。物凄い無表情な容貌で何時間もじっとしていた。どうしたって聞いたって答えやしない。お前にだって何も話していないんだ。一人で全部抱え込んだままおかしくなっていったんだ」
カノンの眼窩の奥に広がる光景がある。
「死ね！」と血の殴り書きに埋め尽くされた石壁。そこにぽつねんと立っているサガ。
冷たい雨に打たれて帰って来た時、カノンを抱きしめて双子座にならないかと言ったサガ。
カノンの捲る医学書を壁に投げつけ、射殺さんばかりの憎悪の視線を投げつけてきたたサガ。
カノンに笑いかけなくなったサガ。
ガチッ
カノンが食い縛った歯の合わさる音だ。両の手の平に顔を埋めて彼は叫んだ。
「滅茶苦茶だ!!　外では何とかやってるんだろうさ!!　でも滅茶苦茶だ!!」

呪詛だった。

カノンは、彼とサガとの間を破壊したものに呪詛を送る。互いしかなかった特別な、血族への愛情が、何ものかによって侵略され踏みにじられた。サガの、双子の弟への甘えや、傲慢、慈しみ、血の絆の一切を“憎悪”に塗り変えてしまった何かがある。正体の掴めぬそれを、カノンは激しく激しく呪う。

カノンの肺が深く息を吸い込んだ。

顔を両手に隠したまま、カノンは仰け反り天を仰ぐ。

「仕方がないじゃないかあいつはオレがいると、オレを見てますます自分（サガ）を憎むんだ。だったら離れた方がいいじゃないか」

小刻みに震える体を見て、アイオロスはカノンが泣いているのだと思った。けれど、彼の両腕が力なく落下し、仰ぎ続ける光が見えたとき、その低音の希望の中にサガの姿を見た。

アイオロスの口から泣笑いの言葉が漏れる。

「そっくりだ……」

なんとこの二人の持つ温度の似ている事だろう。双子という家族、兄弟だからであろうか？　それならリュコンと自分もこんな風に似るのだろうか？

アイオロスの眸は看破する。どんなに自分がサガを分りたく、彼に近づこうと思っても、サガに近づきたく、カノンのようになりたいと願っても、それは決して自分には出来ない事なのだ。

自分には決してあんな希望は見ることが出来ない。

「カノン、必ず戻って来ると約束してくれるなら、僕がサガを見てるよ。嫌がられるだろうけれど、必ず僕が見てる」

カノンは、頭を巡らせてアイオロスを確認すると、小さく笑った。

「馬鹿だなぁ…あいつはお前の事を一番意識しているんだぜ…？」

ザッ

カーテンが激しい勢いで跳ね上がった。

「風が…強くなった…」

アイオロスは窓を見やって呟くと、立ち上がり硝子を閉じた。走っていく雲の影が眼下に見える。

「サガがこの世で一番気にしているのが射手座のアイオロスで、サガがこの世で一番どうでもいいと思っているのが、ジェミニの弟のカノンだよ」

背に鼻歌を歌うような言葉が流れてくる。振り向いてアイオロスは言った。

「カノン、サガはお前の事、どうでもいいなんで思っちゃいないよ」

「はっ！　そこが、アイオロス、サガが惹かれて仕方のないところだ。お前は健康なんだ。サガは自分が一番大事で、どうでもいいんだ。だからオレの事もどうでもいいんだよ」

黙って心底悲しそうに自分を見るアイオロスに、カノンは破顔した。やさしい笑顔を向けて、

「おまえって人間は、なんでそうなんだろうな…」

と、漏らした。

アイオロスは宮門に立ち去っていくカノンの背を見送った。

カノンは振り返らなかった。別れる際に、カノンはやっとリュコンに触れた。人差し指で丸い頬を二度つつくと、

「じゃあな」といって歩いていった。

これが、アイオロスとカノンの最後に交わした挨拶になった。

カノンは南米に行ったきり、再び聖域の地を踏む事無く、六年後消息を絶った。

「射手座は最近良く笑っているな」
預かっていた書類を届けるために、教皇宮内の山羊座の執務室を訪れていたユーレニアは、シュラに水を向けた。
シュラは煩そうに眉を寄せる顔をユーレニアに向けると、「そうか？」とだけ返した。
「そうそう。いい顔になってきた。最初の頃はただ性質が良いというだけで、随分と危なっかしい子だなぁと思っていたものだけど、やっぱりあの年頃は面白いね。変わりたいとか、変わりたくないとか自問自答する間もなくするすると変化していくんだ」
何時の間にかシュラが繁々とユーレニアの顔を見ている。
「何か支柱となるような、価値や法則に気付いたとき、それがあんまり正当だったり美しく見えてしまったりすると、今度はそれを忘れまいと必死になる。必死に掴んだものを逃すまいとする姿勢は、時に成長の芽を摘んでしまう。だからあれぐらいが丁度いいんだと思うね。あんまりつつかず、自分の喜べる方向にどんどん道を敷いていく事だ」
シュラの眉間がぐっと狭まった。「おい」、何が言いたいんだ、と問いかけようとした所でふわりとした笑みにぶつかった。
「双子座が失態（しく）じったぞ。明日、全ての黄金と白銀、長老連を集めて詮議の会が持たれる。くれぐれも遅参なきようにな」
「何をやらかしたんだ？　奴は」
一番失敗に縁遠いと思っていた人間の名に驚き、シュラは咄嗟に言葉を保つ事が出来なかった。
魚座は端麗な面を硬質に光らせて答える。
「部下五人を失った」と。

ルーマニアに潜伏していた風の旗下にある五人の折衝者が、かの国の秘密警察によって殺害され、さらに、政府は聖域に対して事件の鉗口を発してくるという過去に例を見ない悶着が、聖歴二七九七年二月十六日に起こった。

聖域の名を騙って一同に集められた五名の折衝者が銃殺され、政府は今後一切の聖域の介入の拒否を通告してきたのである。

折衝者は、派遣された先の国に有利に働く者達ではない。彼等の仕事は、派遣された国と外の国との裏取引にその身を踊らす事だ。

例えば政治犯、思想犯の交換、ゲリラの受け渡し…。表向けには死亡を伝えられる様々な事件の事実を処理しつづけ、記録することが彼等の役割だ。

命を失った折衝者の報告の中には、任務の遂行に生命の危険を感じると上訴される記事があった。刻一刻とルーマニア政府との緊張感が高まっていた事は周知の事実である。適切な判断を下せずにむざむざ五人の命をくれてやった事、それに対して双子座は責任の帰着を問われ、一ヶ月の謹慎処分、向こう一ヵ年の減俸、その他様々な罰刑を受諾し、双子の弟、半身(カノン)が聖域を去った最初の一月をたった独り宮に篭って生活した。

彼の経歴に傷がついたと陰口叩く者も多かったが、三月、世界に散らばる観葉花の原種咲き乱れる野辺に立ったサガの本意を図れる者は誰も居ない。

齢十四にして、生に倦む者のが、溢れ返る生命の只中に佇み、身に纏う闇夜の花粉をわが身を砕かんが如くに撒き散らす。

黎い胞子は直ぐにも焼き切れて、サガの口元には微笑が浮かぶ。

光の中に立ち続ければ、それ程かからず消える事が出来そうではないか？

サガは気付いていた。
アイオロスは変わった。
去年の六月、怯えるように話し掛けていた姿が、力んだぎこちない笑顔を作るようになり、遠くから眺める表情に変わった。そしてさらに、割り切った接し方に変化したと思いきや…今は———心底からの笑顔に変わっている。
早朝、柱廊ですれ違いざまに声を掛けられたその透徹った明るさは何だろう。
何の変哲もない「おはよう、サガ」というたった一言である。
サガは、自らの光を見つけた。
もう直ぐに六月が訪れようとしていた。

アイオロスは何度も時計の針を確認していた。
教皇宮の執務室に居る。
近頃リュコンの様子がおかしいので彼の気はそぞろに落ち着かない。夜、よくぐずるようになった。人見知りのない子だと思って居たのに、近頃はなかなか自分以外の人間に抱かれたがらない。
なるべく自宮に仕事を持ち帰るようにしているが、やはりどうしてもここでなくてはこなせない仕事があった。
やっと自分の采配が飲み込めてきただけに仕事は徐々に増加の傾向にある。
今朝は特にむずかっていた。這い這いを始めたリュコンを、午前中アルデバランに預けて今日は今朝から教皇宮に閉じ篭りきりである。
昼には人馬宮のアトゥーイにリュコンは託されているはずだった。リュコンの夕の食事を何とか頼み込んだが、彼は二十一時には宮を辞す。

健やかに眠っていてくれていればいいが…。集中力に欠ける仕事は細々としたミスを生む。アイオロスが教皇宮を辞したのは深夜を回っていた。

胸騒ぎがした。こんなに遅くまで、弟を独りにしたことはなかった。
泣いているように思った。泣き声が聞こえるように思う。リュコンの。
独りで泣いているのかも知れない。あの部屋で。
考えると胸の潰れる心地だ。能う限りの速さで旧道を駆け下り、自宮へ続く柯道を折れた。
とたん、肌を刺す残留思念。リュコンの泣き声の残滓。
アイオロスは人馬宮に飛び込んだ。一気に私室への階段を駆け上る。
扉の取っ手に手を掛けた。これを引けば中には…
「リュコン」と呼びかけ扉を押しのけて敷居を跨いだアイオロスの体が凍った。

サガ…？

風を入れるために開け放った窓辺。そこにサガがリュコンを抱いて腰掛けている。
机の上で細く芯を出した洋燈が、香るが如く灯って居る。
耳を澄ませば、どこか懐かしい異国の子守唄の粒子がそぞろ壁にぶつかって、見えない音をはじて溶けている。

Qe oyo maja qu ja mujaqu
Ma yo me sono ola fuh ja fuzaque

やさしい眠りを眠りなさい
愛しいあなたに美しい朝をあげましょう

戸口で動けないでいるアイオロスに、サガは泰然として微笑んだ。
「よく似ている…お前の弟の泣き声も、お前の泣き声も、とてもよく聞こえる…」
アイオロスは立ち竦んだまま返した。
「オレの泣き声なんて…サガの前で泣いたこと何か一度だってないよ?」
笑ったらいいのか、泣いたらいいのか分らない甘い昂揚感で全身が痺れる。アイオロスの目の前に、サガが居た。
「お前の泣き声は良く聞こえる…」
歌うようにサガは呟いた。
アイオロスは右足を床から引き剥がした。次に左足を、そしてまた右足を。人間は何て不器用に歩くのだろう。
サガの傍にアイオロスが立つと、窓辺の二人はアイオロスの影下に入る。アイオロスはサガを見詰めた。
サガの眸がそれにしっかりと合わさる。

アイオロスは、リュコンと一緒に、サガを抱きしめていた。
「ほら見ろ…やっぱり君はよく泣くじゃないか…」
柔らかいサガの発音が、懐かしくアイオロスの胸に詰まる。
サガの左手がゆっくりと上がった。
右手は、アイオロスの頭に柔らかくおとされた。
「アイオロス…私は謝らないよ。君にした行動がどんなに理不尽なものであったか分るけれど、私はけして謝らない」
開らかれた茶色の玉から、透徹った涙が流れつづける。向かいの壁を凝視したまま、アイオロスの耳は全神経を傾けてサガの言葉を受け取り尽くそうとしていた。
「私は君に何も話さない」
アイオロスの目蓋が落ちる…涙が流れ切る。
「けれど、これから先君に偽ることはしない」
誤らない、一つの理由を話さない、そのかわりこの先の人生の中で何より偽りの無い自分自身を君に見せよう…だから……。
アイオロスはサガを抱きしめながら、狡さをさらけ出す告白を聞く。
サガの告白は、一年前、沈んでいった言葉に形を与えた。
「本当に　私の姿が見えるのか」
なんと傲慢な言葉。

なんと自侭な言葉。
なんと思いやりの無い言葉。
答えられるわけが無い。
見えるのか、見えないかを問題にした問いかけではないのだ。
自分（問う側）の希(のぞ)む姿で我を身よ。
問いかけではなく、それは一つの哀しくおかしな人間の願望なのだ。
ああ、本当は、憎んでいたのだ、と、アイオロスの心はしなやかに呼吸し始めた。
サガに対する蟠りが氷解する。
自分に非があったのだろうと、それを全ての解に当てはめてきた。しかしそれは、自分にとって何の解決にもなっていなかった。
サガの生活の中から切り捨てられた。それが、どんなに辛かったことだろう。
しかし、その辛さの後ろに恨めしさがあった事を今の今まで知らぬ振りをしてきた。
人から問われた時、自らの中にあるサガへの不満にはっきりとした形を与えたくなかった。
たしかに、アイオロスはサガに対して悪感を持っていたにもかかわらず。
幼友達で、賢く、やさしく、綺麗だったサガ。その彼を厭うことを彼は無意識の衷に拒絶していた。
何故か。
サガはアイオロスにとってもう一人の自分だった。親兄弟を持たずに過ごしたアイオロスにとって、自らの帰属すべき場所はサガである。サガの許容以内でアイオロスは自分自身の価値判断を持ち、個として存在した。
互いが互いの愛情を糧に成長してきた。良し悪しは別に。

アイオロスは霧の晴れた眸の奥で次々と扉を開け放つ。
サガに嫌われたくなかった。この世に記憶する初めての愛情をくれた人。
サガを嫌いたくなかった。まるで罪を犯しているような気分に陥るから。
サガへの怒りに気付きたくなかった。自分がどれ程自分を殺して彼の好意を受けつづけようとしていたか、気付きたくなかったから。
ムウの言葉が蘇る。
「赤子というモノは、本来愛情を媚びる生き物です」
アイオロスは自分がサガに愛情を媚びていた事を知る。扉がまた一つ開かれた。
媚びなければ愛情は得られないのだろうか。相手の意に則さなければその愛情の甘露を飲む事は出来ないのだろうか。
もはやアイオロスは力強くそれを否定する。
リュコン、リュコン――幼い弟よ、どれほど彼の幸福を願うことか……もし彼が、自分の愛情を得ようと、常に自分の顔色を窺うならどんなに辛いことだろう。
アイオロスは、リュコンを支配できるから愛しく思うのではない。眠いときには欠伸をし、機嫌の悪いときにはむずかり、嬉しいときには体一杯でそれを表に出そうと足掻く。その怯える事無い自由な様が、何より何よりいとおしい。
長ずれば、赤子のように何もかも自侭にとは行かないだろう。しかし、もし彼の弟が、どんな場所や環境の中に置かれようと、清々と彼自身の姿で息してくれたら、なんと嬉しく誇らしいことだろう。
扉が開く。
弟の幸福を願う。その幸福な姿を、のびのびと自分自身の姿で生きていることを良しと感じる自分(アイオロス)は、

ではどうなのか。自分はそんな姿でいなくても良いのだろうか。幸福でなくても満足だろうか。
なんという問いかけ、なんという応えの数々。
アイオロスは幸福になりたかった。美味しい物を食して幸せになる者もいるだろう、美しい音楽を聞いて幸せになるものもいるだろう、本を読むこと、おしゃべりをすること――様々な形で幸せになるものがいるだろう。
けれどアイオロスは、生きていることに幸せな人間になりたいと思った。
くつくつと可笑しさがこみ上げる。リュコンに願う幸福、そのどれもが自分がなりたかった幸福に他ならない。
幸福を、リュコンにばかり任せてよいか？
否。きっと自分はそれを羨むだろう。弟を羨むような兄になりたいか？
あぁ……けして、けしてそんな人間にはなりたくない――。
無償では生きられない。
何かをいとおしく感ずるのは、誰かにいとおしく思われたからだ。
いとおしく扱われたことなくして、どうしていとおしさをしるだろう。
愛したいのは愛されたいからだ。
愛する幸福も、愛される幸福もある。
あいすることで、あいした対象から同じものが返されるわけではないが、必ず別の何かからそれはもたらされるだろう。
何故サガをいとおしく、その存在のあることを嬉しく思うのだろう。ムウにではなく、アルデバランにでも、カノンにでもなかった。

何故サガであったか。
それは、何より彼が、サガがアイオロスに思いを発していたからではないだろうか。
そして、カノンからあいされていたからではないだろうか。
サガの、アイオロスに掛ける希望と、カノンのサガに対する親愛の念。それは少しづつ零れたり、染み出したりしながらアイオロスに届くのだ。それがやがて満ちてサガへ向かって溢れ出す。
流れて自分を満たし、溢れてまたどこかへ流れていくもの、その名は知らない。
無形で目に見えず、曖昧なもの。
化学式にも姿を隠したままなそれ。
それが誰の空間にも、海を満たす海水のように、呼吸を満たす空気のように存在している――。
もはや始まりも分らぬ，名の知れぬものが。

ほんとう、私の姿が見えるのか？

見えるよ。

だから……

一緒に生きていこう……

アイオロスは、限りのある腕でサガと小さな弟を抱きしめ、目蓋の裏に多くの人の顔を思い浮かべて、深く深く胸のうちで囁いた。
傷付いても、苦しくても、それでも生きている人たちの姿が見える。
だから、生きていこう。
どこまでも。
この腕に抱ける命を手放す事無く。

アイオロスの胸に　星が　灯る。